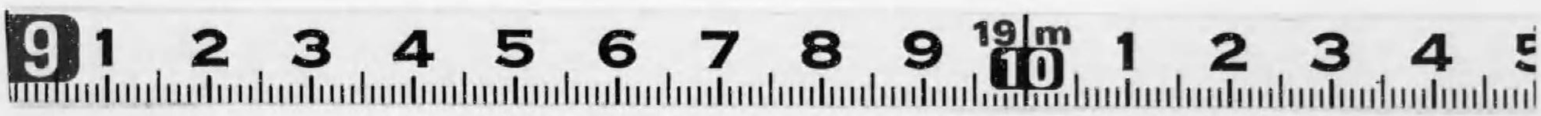
裏


9 1 2 3 4 5 6 7 8 9 19 m 10 1 2 3 4

501
177

501-177

貴重

野の詞と蜜蜂の生活

永遠の幼兒

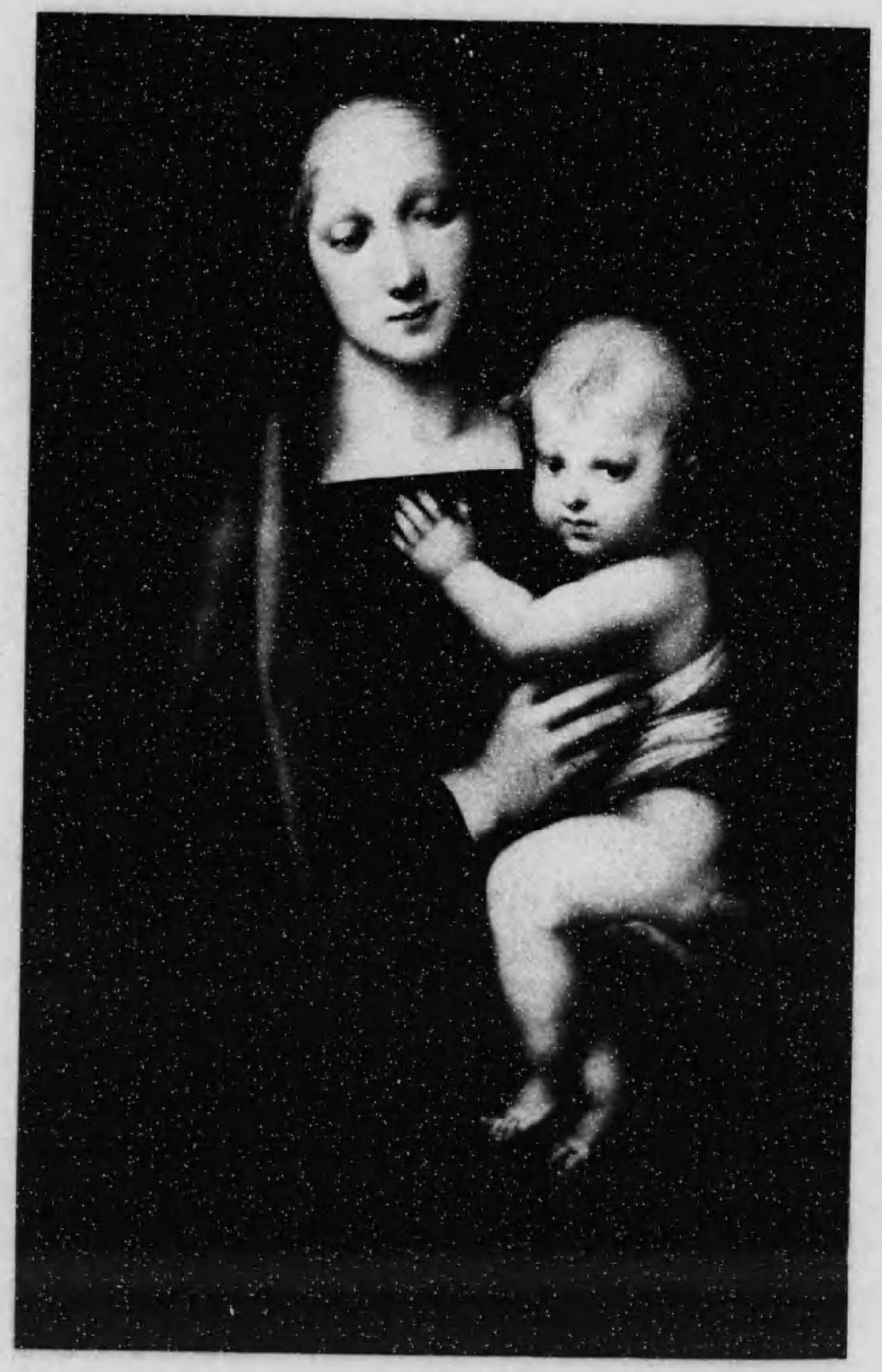
宮崎安右衛門著

1921

東京 叢文閣 出版

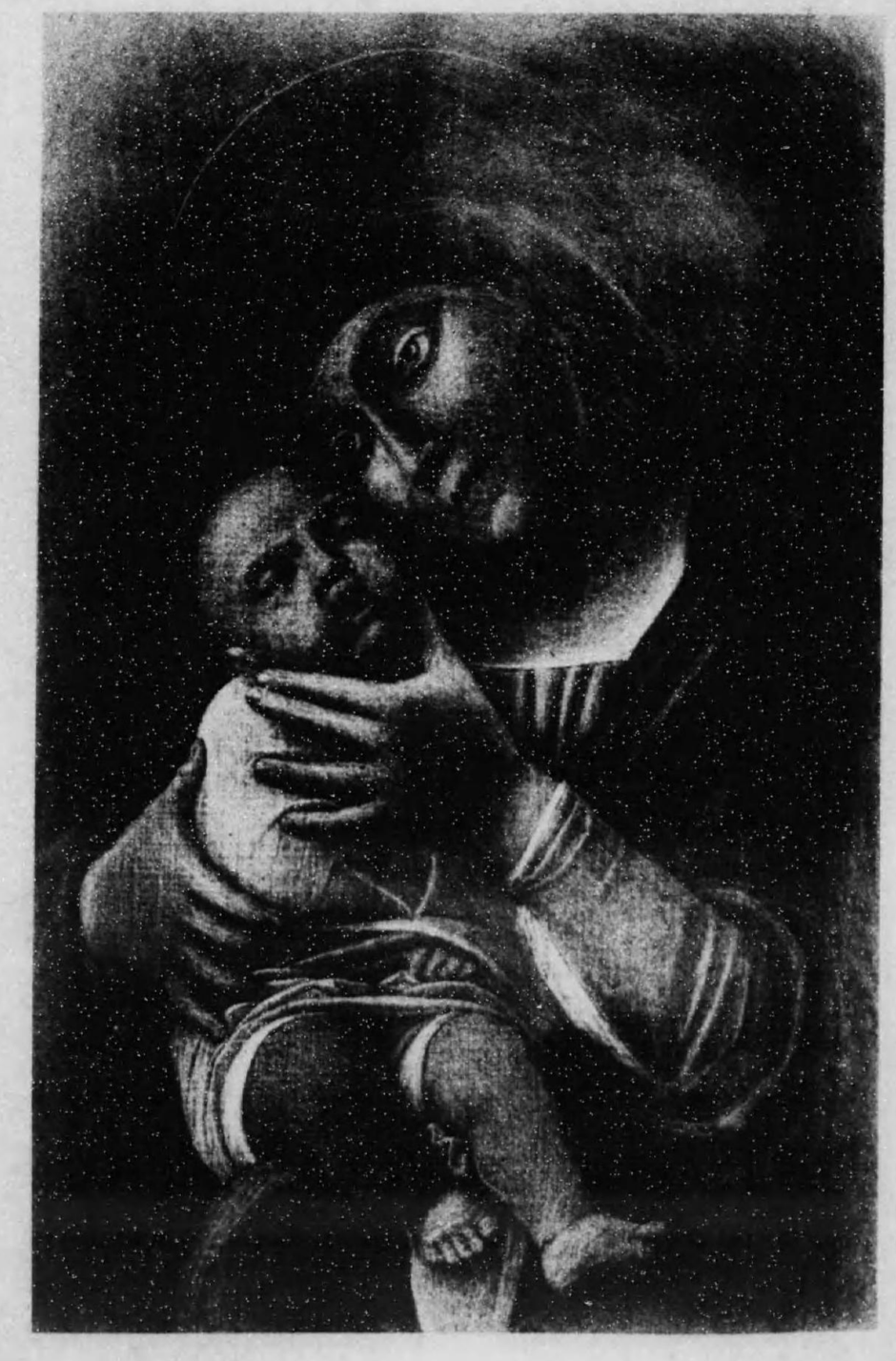
大正
10 10.19
内交

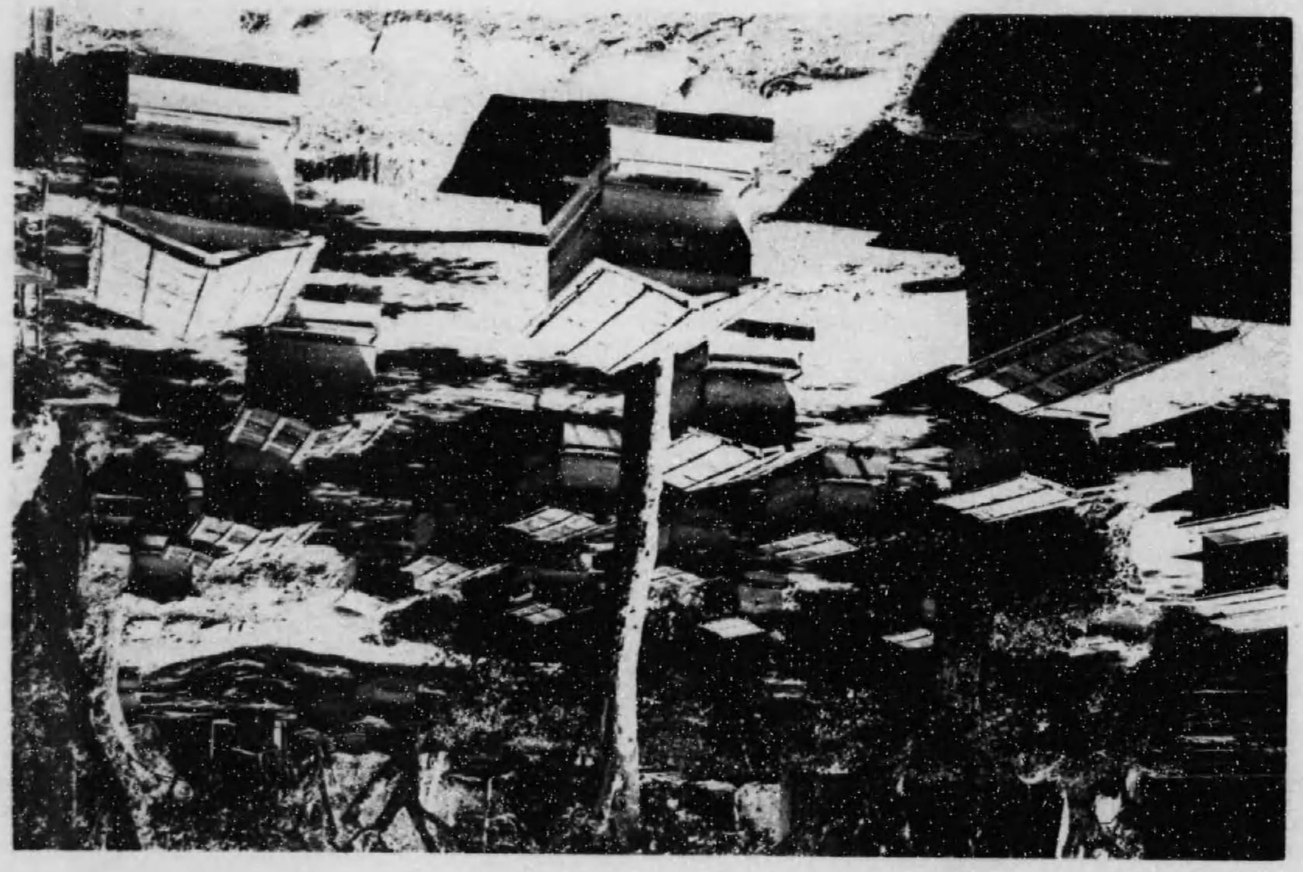
私が初めての詩集『永遠の幼兒』一卷
を代々木草房に集る子供達に贈る。



幼兒らの我に來たるを許せ、止むな、神の國は斯の如き者の國なり。誠に汝らに告ぐ、凡そ幼兒の如くに神の國をうくる者ならずは之に入ること能はず。斯くて幼兒を抱き手をその上におきて祝し給へり。

——馬可傳十章十四より十六——





序詩

晴れた　緑りの五月の朝に
私は仰ぐ養蜂園
見よ　見よ
からから　からと蒼穹に
哄笑する陽の眞ッ赤な顔を
このとき　おう私の魂は望みに躍る
ああ　今日も一日幸福だ
私は祈る　仕事の始め
……

すると　おう可愛い
何處から忍び寄つたのか
ソツト　輕いキスを投げてゆく．
素敏こい少女のやうな可愛い微風

見れば　草や木の葉は樂しくも
ささやき交し
交す　たびごと
つるりと滑る草の露

おやおや　小さい蛙がお辭儀した
消えて無くなる草露に

仕事は始る氣もちよく
私の瞳は輝く輝く
おう！　一齊に飛び出す巣房より
兄弟蜜蜂勢を揃へ
いとも輕やか　すいすいと
勞働を歌ふ．はれやかさ

天空へ！　織るが如くに翔けり往く
おう　その羽搏の唸り聲
堪らなく　私を魅してゆく
まあ　何んといふ莊重な交響曲であらう
實にもの凄い
實に素晴しい

是はまた　何んといふ偉大さだ
もう　私の魂は顫えてすすり泣く
遂に　ああ遂に
餘りに　ひどすぎる幸福に
危なく私は卒倒しさうだ

私は聲を張りあげる　夢中になつて
悅びの獨唱は天へと飛んでゆく
おう　それは歡喜だ
おう　それは感謝だ

見よ　幾萬といふ小さき兄弟らの生活を

おもへ　その沈默と勞役を

人間よ——と　自分は叫ぶ
聽いてお呉れ
小さき兄弟達のその生活を
共產　相愛　勤勞　扶助
美しい是らの生活を何ぞ君達は眺めるか

虫けらと嘲けらるる彼等の世界に
人間の　難しと嘆くその理想が
障りなく　行はれゆく
ああ！　耻づる　私達の世界の醜いことを

わたしの兄弟蜜蜂は
暗い朝から
星光る夕ぐれ迄も
その快き勞役に惜しみなく己れを生かす
聖母(マドンナ)のために
幼な兒のために
彼らは仕へ　かつ歌ふ
倦まず撓まず
野に山に　森に畑に
花より花に訪ねてまはる
微笑む花は彼らを抱き
靜かに何かを語る

おう　夢のやうなこの神祕　此の會話
ああ　ここに白晝(ひるま)の奇蹟は生る
マリアの受胎を憶へ

自分は躍るおう兄弟蜜蜂よ
私は今跪れ伏して
きみたちの選ばれたる聖なる使命の上に
心をこめて感謝と喜悅を贈る——

内容

序詩
蜜蜂の生活……一
はしがき　一日本蜂　二西洋蜂　三蜂體の構造　四蜜蜂の愛と勞働　五蜜蜂の勤勞　六蜜蜂の智慧　七蜜蜂の感情　八蜜蜂の喜怒　九蜜蜂の言葉　十蜜蜂の記憶　十一女王蜂　十二勞蜂と雄蜂　十三蜜蜂の食物　十四分封　十五蜜蜂の敵
永遠の幼兒……八二
異變來る……九五
煩惱……九七
オオ馬糞よ……九九
自然法爾……一〇二
永遠の神祕……一〇四
最後の審判……一〇五
睡蓮……一〇七
十字架に見へる電信柱……一〇九
凱旋の老將軍……一一二
夏よ來れ……一一四
朝の散歩……一一六
赤坊の前に耻ぢよ……一一九
彼女の意志……一二一
或日の祈禱……一二三
お布施……一二四
夢か夢か……一二六
恐しい色……一二九

野の禮拜……一三一
迷路……一三三
聖獸……一三五
老僧の深切……一三七
星の嘆き……一三九
章魚の足……一四三
或時の聲……一四五
お母さん……一四七
叱られて……一五一
自分は野の香りを嗅ぐ……一五三
榮えよ娘……一五五
自分の内に生きるべアトリチエー……一五七
野の祭りに招待されて……一六〇

途上の光景……一六三
運命を司る者……一六七
ダンスする蠅……一六九
オオ私はうれしい……一七一
KAMEKOさん……一七四
獻花……一七六
自分に語る……一七八
業火……一八〇
祈禱……一八二
神われと共に在さば……一八六
天路歴程の一節……一八八
有か無か……一九〇
創造は闇より……一九一

復活……一九四
曉方の交響樂……一九六
日記……一〇〇
神に生き度い……一〇二
貴方も一緒に悅んで下さい……一〇四
お前の言葉に……一〇六
空想に眠る……一〇八
孤獨者の散步……一一〇
野の祭禮……一一一
脫線……一一三
動物界の爭ひ……一一五
共有になるまで……一一七
勞働は祈り……一一〇

野の香りによせて歌へる　一、二、三篇……一一一
斷章……一一四
野の言葉……一一四

口繪

聖母と聖兒　ラ・フロエル作
聖母と聖兒　マンテニア作
蜜蜂のお家

永遠の幼兒

宮崎安右衛門著

蜜蜂の生活

はしがき

舊約聖書を開いて見ると、その昔我々の祖先アダムとエバが住んでゐたエデンの樂園は「乳と蜜と流るゝ處」と筆者は曰つてゐます。

してみれば蜜蜂は原始時代から存在してゐたことと、アダムやエバや又はその子供たちが甘い蜜を食料として如何に愛してゐたかゞおのづと解ります。

昔、チユートン人の新郎新婦は結婚してから三十日（約一ヶ月）の間といふものは、蜜で造つたお酒を飲むの習慣がありました。蜜月の由來もここから起つたのでありますが、今日ではホネームンと言へば、直ぐ花婿花嫁が相携へて旅行するかの如くに想はれてゐます。今

でも西洋では結婚の際は蜜酒を飲む遺風が傳つてゐるさうです。

結婚と蜜蜂

まあ何と言ふ享樂の象徴でせう。

わが花嫁よ
わが園に入り
わが蜜房と蜜とを食らひ
わが酒とわが乳とを飲めり

斯うした歡樂の饗宴にも蜜蜂は無くてならぬ一つであります。人生の歡樂に用ひらるゝ蜂蜜も一轉しては

「あそび女の口唇は蜜を滴らし、その口は脂よりも滑かなり」

と、咀ひの象徴にも使はれます程、蜜そのものは偉大なる魅力を有する液體であります。

私は今、この不思議なる液體を分泌する蜜蜂の世界を順禮し、併せてその生活の一端を觀察したいとおもひます。

一　日本蜂

わが日本に養蜂の始つたのは隨分古い事ださうです。何でも皇極天皇の時代あたりに百濟の太子餘豐といふ人が四枚ほどの蜜蜂の房を持參して、大和の三輪山に放養したのが、そもそも日本に於ける自然養蜂の一番始めらしいのです。以後千數百年自然に巣を營み、或は人に飼はれたりして來ました。そして今日のやうに人工的に完全に飼養されるやうになつたわけなのです。で、種類も最初は日本蜂一種でした。勿論この外にも野生の蜜蜂は澤山にあつたとは云ふ迄もありません。例へば、俗に熊蜂と申す黄蜂、姫蜂、クロマル蜂或はヒメハナ蜂アルナ蜂キャル蜂、トラ蜂アカマル蜂モンハナ蜂など澤山あつて、それらの蜂は多少の採蜜はするやうですが、大群を爲し巣脾を造營し以て規則正しく勞働する蜂では無いのです、たゞ日本蜂のみはそれらの條件を完備して居ります、昔から藥種舗其他で販賣して來た蜜蜂は概してこの日本蜂の產蜜でありました。しかし此日本蜂も今日では洋種の蜜蜂が飼はれるやうになつてからは、顧みる人が殆んど無くなりました、何う云ふわけかと尋ねてみると、

それには相當の理由があるようです。

一體日本の蜂は非常に感情が強くて怒りつぽい、巣内の境遇が意に滿たぬ時は忘けて少しも働らかない、衰弱性の速いこと、分封（俗に子別れと云ふ）の度合が馬鹿に劇しい事、逃去の念の萠すことの早いこと、貯蜜が至つて貧しいこと、他の巣箱へ蜜の掠奪にゆく事（之を盜蜂といふ）是らの缺點が（飼育者の側から見て）あるので、可愛さうに日本蜂は飼養者の愛を惹きません。日本蜂自身より人間を見れば

「人間の指す俺らの缺點と云ふ者は實は俺の本性である、人間は自分に都合よき事計り謀つてゐる。隨分利己的な動物だ」

と云ふかも知れません。其處へゆくと、西洋種の蜜蜂は本當に幸福です、今日では殆んど全部が洋種專門と云つても可いほど日本の養蜂界は西洋種を以て滿たされてゐます。しかしながら其の洋種にも色々と區別があるのです。

二　西洋蜂

一體蜜蜂は昆蟲學上、膜翅目の一科蜜蜂科中蜜蜂屬に入るもので、今日世界中に分布してゐる蜜蜂の種類は非常に多いさうです。ざつと大別するならば

1・普通蜜蜂（西洋種）　アピス、メリフイカ（Apis mellifica）
2　東洋印度產普通蜜蜂　アピス、インデカ（Apis indica）
3　同　小蜜蜂　アピス、フロリア（Apis floria）
4　同　大蜜蜂　アピス、ドルサメ（Apis dolsame）

今日、日本及西洋に飼育せられてゐる蜂は主としてアピス、メリフイカに屬するものです。其他の三種は概して東印度地方に飼養せられてゐます。從來日本種の蜂も所屬が決つてはゐませんでしたが、近來はアピス、インヂカに屬するやうになりました。

ゴールデンイタリア種——この蜂は美しいのでゴールデンイタリアと云はれ一般に人の注意を惹きます。性質は至つて柔和溫順で、產卵力の旺盛勞働を好む點、外に敵對する防禦力

の強い事其他群の大群なる事管理の樂な點です、然し寒さには少々弱いやうです、越冬に際し貯蜜が足りないと心配です、賢い養蜂者は此種蜂の弱點をよく知つてゐて、それ相應に保護してやります。

サイプリア種——地中海サイプラス島の原產であります。此蜂も米國のテキサスより輸入せられたと言はれてゐます。容姿は腹の方が少し尖つて黑色を帶び、背中は幾筋かの橙黃色な斑點があり、胸部には茶褐色な美事な毛を以て蔽はれてゐます、珍しく美しい蜂です。わけても此種の蜂王は美麗にすぎて他蜂より妬みをうける位です、性質は感覺の力が恐ろしく鋭敏で取扱ひに一寸でも不注意な事があると怒ります。しかし繁殖力が極めて强く採蜜力が可なりあるので（想像よりも）往々飼養者を驚かします、敵に對しても抵抗力强く、殊に無斷で失敬な逃亡を企むやうな危險性は決して無いと云つてもよい程です、ですから隨分愛されます。

カーニオラ種——墺國カーニオラのアルプス高原地方の原產です、一名アルピンカーニオラとも呼ばれてゐます、明治三十三年頃米國より輸入されたものであります。そのスタイル

はイタリア種とほゞ似通つた處があります、少々腹が尖り腹部環節の後半が、まるく柔かな銀白色の毛が生へて見たところ如何にも綺麗です。が年をとるに隨ひ段々白色が衰へてそれがすべすべとして黒色に變ります。性質も極く柔順で取扱ひの時に覆面布などをかける面倒は少しもありません、からだが強く能く勞働し、隨つて採蜜力もイタリア、サイプリア以上だと騷がれてゐます。幸福な蜂です、それに飛翔力の旺盛な事は、何んな遠方でも採蜜に出かけます、殊に越冬力に至つては日本のやうな寒季の多い地方では安じて飼ひ得る理想的の蜂かともおもひます。

カウカシア種——この種は露國高架索地方の原産です、此種は最初米國あたりでは「螫さぬ蜂」ともてはやされたものですが、何うして日本に來ると螫して〳〵叶ひません。一方より云へば、螫されるのは蜂に對する飼養者の愛が足りないとも云へます、若しさうならば恥しい事です、「オイ兄弟！」と、本當に心から親しみと愛とを持ち得るやうになれば、決して蜂は螫すものではありません。殊に敏感な蜂の事ですから、私は此の經驗を握つてゐます、此の貴い經驗を握る迄には隨分私も螫されました、しかし餘り螫されると免役性になります

（この事は感心した事ではない）。

此種の採蜜力の盛んな事はおどろく可きものです、が、威嚇する癖があるので餘り悦ばれない、しかし貯蜜の消費は少く、それに此の蜂は用心が深くて常に貯蜜を大切にしますから越冬力も安心が出來ます。

一體巣箱の溫度は六十度平均です、是より暑くても寒くても不可ません。寒くなると貯蜜を吸取して盛んに煽風します。此の煽風によつて室内の溫度は暑くも又涼しくも、極く自由自在に平均に保たれます、故に一ヶ年の中で五六月の花咲く時季が彼等の一番活動する大切な季節です。

此外にもバナツト種及ジャーマン種と色々蜂の種類はあるやうですが、今のところ以上擧げた四種の蜂が一番よく飼はれてゐます。特に私の經驗ではイタリア種とカーニオラ種との二種が、早く人間に親しむやうな氣がする、そして管理が馴れて來るとこの二種はよく働き出します、本當に可愛いものです、私は蜜蜂の勞働や、その育兒や、聖母（女王蜂のことを

私は聖母と云ふ、此の方が私共の感じとピッタリする)に對する淨い彼等の愛、又は勞蜂(俗に働蜂と云ふ)同志の相互扶助の模樣などを眺めるごとに、あゝ涙なしには私は接する事は出來ません。その生活は又私達人間と人間との關係を愛にめぐみます。

ほんとに小さな可愛い、あの蜜蜂は私共人間の教師であります、昔の人が尊い靈蟲と拜んだ事も決して無理とはおもひません。

三　蜂體の構造

其處で私は蜂體の構造を少しばかり覗き度いと思ひます。

蜜蜂の眼は左右に大きな複眼と頭の上に三個の單眼とがあります。複眼は無數の小眼(數千)が集合したもので各々六角形を爲してゐます。一體昆蟲といふものは人間の眼のやうに自由に廻轉が出來ません、其處で無數の小眼が集合してゐると、一時に凡ての方角を視ることが出來ます。

私は昆蟲の眼に於て造物主の細心なる技巧を仰ぎます。ことに單眼は複眼の視力を一層援

けます、飛翔する何の昆蟲を見ても、複眼或は單眼を有たないものとて殆んどありません。單眼は近視に於て驚くべき用をなし、複眼は遠視に於て如何な微細なるものをも決して見脫しません。

蜜蜂は視力に於て二つの武器を惠まれてゐるわけなのです。尤も蜜蜂の眼は人間の眼のやうに物の本質を見透す力があるか何うかは一寸解りませぬが、しかし、蜂が人間の心を觀破するの速かなる事を私は知つてゐます。確かに蜜蜂自身は一見して對手が敵であるか否やは直ぐ識別するやうです。怖しい事には少しでも接する人の心に邪心があつて御覽なさい、蜜蜂はそれを觀破して怒ります。まこと彼等に接するには聖壇に跪く敬虔なる信仰的態度が必要であります。

それから又蜜蜂には頭部の中央に觸角といふ大切な感覺機能を有つて居ります、一寸見ると是は二本の角のやうな格構ですが、之が大切な働きを司ります。觸感、嗅感、聽感之等三つの機能はものに應じて敏速に働き出します、この神祕な觸角に甚だ鋭敏な感覺毛が全體に

生へてゐます。蜜蜂同志にあつては此感覺毛でそれ〴〵信號やら交通を致します。嗅ぐことと、聽くことゝの二つも觸角を用ひます、觸角の表面には澤山の細かい小孔があつて、凡てのものを嗅ぎわける力があり、その觸角の末の方にある數多くの微細な小孔は、ものごとを聽きわける力を有つて居ります。晩秋のころ或は早春の時、私達が彼等に飼養して呉れる場合、熟つとその樣子を眺めてゐますと、どうでせう、蜜蜂は可愛いその二本の觸角を、チョロ〳〵と動かしながら香りを嗅ぎつけます。その迅さ、そして仲間に知らせる信號の巧みさ、その表情の愉快さ、實におどろく可きものです。胸部は三つに區分せられてゐます。前胸、中胸、後胸、そのなかでも中胸が最も大きいやうです、脚は三足で胸部についてゐます、その働きは、歩行すること、からだのお掃除、花粉の運搬、それから巣を造るときの工事の援けにもなります、又觸角の働きを助ける事が出來る、脚の全體が纖細な毛で一面に蔽はれてゐる、本當に巧みに造られてゐます。蜜蜂の口は嚙む事と、吸收する事との兩方の作用を兼ねてゐます。この口は敵と鬪つたり、臘を練つたり、巣を作つたり或は物を啣へたり運んだりします、その外に感鬚と申して花蜜花粉を自由に選擇する能力があり、又味感觸感の代用

をも勤めるやうです。聖母蜂や又は父である雄蜂には是らの機能が全く缺けてゐますから肝腎の食物を採收することが出來ません。

それから翅です。

この翅は透明な美しいもので、重に飛行、煽風、振動、信號等で又汚ない處を掃き清めます、翅は蜜蜂に在つては實に重要なる道具の一つです、平均一分間に四百回以上の振動力を有つてゐます、蜜蜂はこの翅の力で一里の道を僅か五分かゝらずして飛行します、恐らく蜜蜂ほど他の昆蟲に比して翅力の速いものはありますまい。三里以外迄は樂々と飛翅してゆきます。その飛行の有樣は恰度矢を射るやうなもの、觀てゐても輕快で氣持がよい、しかもその翅の音が何とも云へぬ音樂的で、丁度それはセロの音律を聞くやうに男性的な豪放さ、その快い顫律は確かに私達人間を夢の國へと魅してゆきます。

觀察はだん〴〵と、お腹の方にゆきます。蜜蜂のお腹の中には、造巣の原料である臘と花蜜を貯める小豆粒のやうな小さな嚢があります。この嚢は胃袋とは全々獨立してゐる、蜜蜂

は花より蜜を吸收して一旦此の嚢に收めます、そして巣に戻つてから六角形の蜜房へそれを吐き出します。

それからあの恐ろしい螫針です。

雄蜂には螫針がありません、なぜなら彼は生殖のみが仕事ですから螫針を有つ必要がないのです、可愛さうに蜂の仲間では彼は生殖が濟めば存在を無視されて了ふので、この地上に生きてゐる間はほんの束の間です、雄蜂に螫針が與へられないわけは生殖以外に生活能力を有つてゐない爲であると想ひます。聖母蜂には螫針がありますが曲つてゐてその用を爲しません、たゞ勞蜂の螫針のみは完全に發達して居ります、實に勞蜂にあつては此螫針が何よりの武器です、螫針の長さは一吋の約十二分の一程あつて、そのさきに九つの魚釣針のやうな逆釣があります、一旦螫すと脱けない、その間に毒瀝を注入して目的を達します。蜜蜂に螫された局部は紅く腫れる、そしてかゆい。蜜蜂は殊に人間の肉のうすい神經線の多い方へ覘つて螫します、肉の厚い膝や股やお尻や腕などは少々螫されても、さほど痛くもありませんが、眼の縁、口唇、鼻の穴、指の先きなど一針見舞をうけて御覽なさい堪りません、初心者ほど

腫れ上つて熱を呼びます。彼は痛みさうな局部を旨い具合に覘ひます、一針も冗費のないやうに。彼はたしかに熟練した獵人です、私などはその始め熟れないうちは隨分と遣られたものです、逃げれば逃げる程趁ひかけて來ます、一旦蜜蜂が怒つたら最後大變です、徹底的に對手を螫さずに置きません。蜜蜂を怒らすのは扱方が亂暴だからです。靜かに落ちついて扱へば蜂は決して憤りはしないものです。蜜蜂は人を螫せば自分も決して生きてはゐません。責任を知つてゐます。螫した蜂は尻の一部が脱落して物狂はしく死にます。おもへば可愛さうなものです。

蜂と蜂と爭ひの時は絶對に螫針は用ひません。多くは咬合ひで果し合ふのです。

四　蜜蜂の愛と勞働

蜜蜂を識るといふ事は、人間を識ると云ふ事にもなります。

私は蜜蜂の生活を知るときに、餘りに人間の生活が自然よりかけ離れて了つたことに驚き且つ悲しむものです。人間が自然を離れる事は人間の致命傷です。淺墓な智慧で人間が自然

に叛逆せうとやるならば、それは本當におほそれた怖ろしい事です。何の時代でも人間は自然に隨順していかなくては、ほんとうに生きてゆく事が難しい、私は恐れる、今の世はあまりに自然を忘れてゐることを！　自然に逆く者は自然に依つて復讐されます。まあごらんなさい憐れな小さい昆蟲ですら自然の命を畏み、自然の命に隨順してゆきます。彼等が自然に隨順することは彼等の成長であり悅びであります、自然と彼等とは二而一であります。私は蜜蜂の生活を想ふごとに特に此の感を深うします。

蜜蜂は數萬あひ合して生活を營むもので、決して單獨では生活が出來ません、團體生活は彼等の中心であり生命であります。若し一疋でもその群から離れるやうな場合には、憂悶苦惱して死にます。私は嘗て蜜蜂の一疋を捕へて、無慈悲にも一夜それを布の袋に監禁して置きました。翌朝になつて見るとどうでせう！　斯の蜜蜂は可愛さうにも死んでゐました。それは餓死でも病死でもない、全く群を離れた爲に狂死したものです。それほど蜜蜂は團體生活を强烈に執着して居ります。團體を離れて個々の存在はあり得ないのです。凡て弱い蟲は團體生活をやり、强い蟲ほど孤立しようとします。孤立する虫は自然に淘汰されて、團體的

に生活する弱い虫は、いつ迄も保存されて往きます。實に痛快な教へではありませんか。不思議な現象ではありませんか。人間でも資本家は孤立しようと欲してゐます。考へて見ると人間が互に愛によつて結び合うてふ事は本當に人を强く生かします。私はこの理を蜜蜂の生活に於て充分に識る事が出來ます。實に團體生活は彼等の始めであつて又終りであります。何ぜ單獨では生活が出來ないか。

その譯は斯うです。

蜜蜂には三異性といふものがあります。それは聖母蜂（俗に女王蜂といふ）と、雄蜂とは繁殖に全力を注ぎますが、生活するだけの能力は有つて有りません、之に反して勞蜂は生活能力は優者であるが肝腎の繁殖力が缺けてゐます。其處で聖母蜂と雄蜂と勞蜂と、斯う三つのものが一體とならん事には生活することが全く不可能です。是らが一致共同してゆく處に彼等の生活も展開されてゆくのです。通常は一群に聖母が一疋と雄蜂が數百疋と勞蜂が數萬とが寄合つて一個の立派な王國をなしてゐます。若し巣内に二疋の聖母蜂が存在するならば、

何うしても巣内の統一がつきません、二疋の聖母蜂がゐれば、必ずどちらか他の一疋を嚙み殺さずには置きません、「天に二日なく國に二王なし」との言葉は蜜蜂の社會にも嚴然と履行されてゐます。小さい虫とは云ひ感心なものではありませんか。

私は、蜜蜂が團體を離れて生活の出來ない事を云ひました。さうです、彼等は巣内の境遇が意に滿たぬ時又は管理者の不熟練な扱ひのため時々逃亡を企らむ事があります。しかし、逃げる時は必ず全群が一致してからです、決して自分ひとりだけ逃げ出すやうな事は致しません、又分封（俗に云ふ子別れ）の時でもさうです。凡ての點に於て全群一致の行動が彼等の習慣です。

然しながら團體以外他の蜜蜂の侵入し來る場合には極力之を巣門にて拒ぎます、或時は嚙殺し或時は追拂ひます、何うして自他の區別を鑒別すか、それは鋭敏な嗅感によつて察知します。けれども時に依ると勢働の多忙な際はつい紛れこんで了つて解られない事があります、そのやうな場合には自他の嗅氣が同化して敵か味方か判斷がつかなくなります、斯うなると

侵入した蜂も目的を忘れて、知らず〳〵のうちに歸化して其處の一員となるやうな不思議な現象を呈します。

いつの頃であつたか何んでも花時の忙しい時季でした。イタリア種の蜂がカーニオラ種の巣箱にゐた事を發見しました。そして此イタリア種はカーニオラ種の育兒に孜々として働いてゐるではありませんか、實に奇觀です、嗅氣が同じであれば、假令その形狀や色の相違があつても決して是を怪しみません、しかし恁んな場合はそれこそ滅多にあるべきではない、大抵は嚴重に巣門を見張つてゐる番兵蜂の爲に一もなく二もなく追ひ出されて仕舞ひます、斯んなやうな譯で他の蜜蜂も自分の處以外の巣へは決して這入りません、同じやうな巣箱が何百箱と並んでゐても皆自分の巣箱をちやんと知つてゐます。決して間違つて入るやうな事はない。中々利潑なものです。蜜蜂の世界では人間の世界のやうに、倫理とか道德とか宗教とか云ふむつかしい教へはありません。それを要するやうな不完全な社會ではないから、すべての事は默つてゐても行はれていきます、巣内に蜜が缺乏したとき、決して自分だけコッ

ソリと失敬するやうな利己的な蜂は探したつて一尾もゐません、餓へるなら全群が同時に餓死します、實に悲壯です。自分だけ生きてりや善いと云ふやうな蜂は一疋だつてゐません。若し一疋が花を尋ねて其處に多量の蜜のある事を見出すらば、忽ち引返して同族を誘導して來ます、そして一致協力仲よく採蜜します。

恐らく昆蟲の中で蜜蜂位自分の一家を愛するものは他に多くありますまい。わが家のためには死を見ること歸する如しです。此言葉は決して誇張した言ひ草ではありません。彼等は自分の家を守るためには死を賭してかゝります。名譽のためでも無く、利慾のためでもなく、全く全群のためです。其處に一點の暗い心もありません、ほんとうに蜜蜂位徹底した昆蟲は無いでせう、私は決して彼等のために提燈を持つのでもなんでもありません、事實が何よりの雄辯ですから。

全群が自分の一部分で、自分が又全群の一部分です。一群一體、切つても切れない關係にあります。若し一蜂の餓えて困つてゐる樣な場合には他蜂は直ぐとその蜜囊より蜜を、彼が舌

より舌に傳へて是を助けます、蜜蜂は他蜂が苦しむのを知らぬ顏して見てはゐません。是は愛でもなければ献身犧牲でも無い、彼自らに在つてはさうせずにはゐられないのであります。全く本能です、燃燒です、さうする事に依つて彼は自分自身をぐん〳〵成長させてゆきます。

嘗て私は蜜蜂の管理中、不注意にも一疋の蜂を踏み殺しました、すると、その悲鳴を聞きつけて大勢の蜂が忽ち私に襲ひかゝり、ウント私を螫しました。ずゐぶん痛かつた、私は痛みのため暫らくは仕事が出來ませんでした。その時私を螫した蜂を見ると皆老蜂でした。敵にあたる蜂は皆老蜂である。若い蜂は一疋だつて敵にあたりはしません、實に不思議です。不思議なわけです、ちやんと斯うした理由があるのです、若蜂は育兒に勞働に甚だ未來があります。反對に老蜂は老い先きが短い、よつて外敵と闘うてよしんば生命を失うても彼等はそれを少しも惜しいとは思ひません、どんな場合でも一番最初に敵にあたつてゆく蜂は悉く老蜂である事は、私をして感動させずには置きませんでした。

あゝ一蜂たりとも無意味の喪失は彼等に甚い悲しみを與へます。幾萬もゐる中で一蜂位は何うなつたつて構はないやうに思へますが、何うして〳〵蜜蜂は一蜂でも失へば大騒ぎです。

觀てゐても、あゝ本當に憐らしい程です。

蜜蜂は又非常に衞生家であります。

もしも巣内に死蜂のある時は直ぐ之を外に擔ひ出します。若し一蜂で咬へ出す事が出來ない場合には、他の二三匹の同僚が協同して、ヨイコラ、ヨイコラと擔ぎ出します。その友情の流露純眞まことに涙ぐましい程です。

室内に少しでも塵が溜れば直ぐ翅を振動して盛んなる煽風を起し、如何に微細な塵と雖も、之を巣門の外に吹き飛ばします。しかし、春季の採蜜に忙しいときは、時に依ると怠けます。

さう云ふ時は私達がお掃除をしてやると、彼等は大變に欣んで益々勞働をつゞけます。

五　蜜蜂の勤勞

「惰る者よ、蟻にゆきその爲すところを見て智慧をえよ」

と、箴言にかいてあります。然し私は是を蜜蜂にゆきて智慧をえよと言ひたい。何とならば、蜜蜂の生活は蟻の生活よりも一層私達人間に近いからです。

御覽なさい。彼等の勤勉な勞働振りを！

夢にだに、サボタージだのストライキだのと云ふものはありません。啻に勤勉だけでは無い、一家の相愛、一家の秩序、一家の和合、是らはみな私達人間にとつて可い模範です。昔から勤勉を以てよく蜜蜂に譬へられます。實際に譬へられるだけの資格があるのですもの、勞働の出來ない冬の間は（花がない故）巣籠りしてゐます。殆んど涅槃に入つたかと想はれる程、靜かな沈默に凡てを委してゐます。然し一陽來復、野に山に花は咲き、風は薫り、みゝ空に雲雀の歌ふところとなつて御覽なさい、彼等の悅びの甚しいこと、そして活動のすばらしいこと、殆んど形容が出來ません、たゞ私は咏讃するより他に術の無い事を知ります。

蜜蜂の活動する春の頃でした、和歌山のＳＴ氏があさ早く巣門を出づる一疋の蜜蜂に白粉をふりかけて置き、それを目標として終日巣箱の前で監視をしてゐました。すると、何うせう吃驚するぢやありませんか、此の蜜蜂は一日に四十八回往復したと云ふ事です。

是につけても蜜蜂の活動力が如何に旺盛であるかゞ解ります。しかも蜜蜂は老いれば老いる程益々働き出して死に至るまでその勞働を止めは致しませぬ。あゝ人間は五十を越すとも う若隱居だとか申します、蜜蜂を思ふ時に私はその若隱居を恥しく思ひます。

おう倒れる迄奮闘する蜜蜂よ！　きみ達こそ生に徹する尊ひ生活者である。私は蜜蜂の倦まざる勞働をおもふ時、「わが父は今に至る迄働き給ふ、我も又働く也」と言つた耶蘇の言葉を泌々おもひ出します。

蜜蜂の活動は全群の大小に影響する事が甚しいのです、大群になればなるほど、勞働の狀態が目覺ましい、が小群になると、意氣が頓みに衰へて十分な活動が出來ません、そして全體に小群なる程成績がわるいやうです。注意すべき事です。蜜蜂は勤勉です、然しながら、自分達の巣内に蜜の滿つる時は、もう勞働は止めます、何ぜなら、彼は冬支度が出來たと思へば、それで滿足します。支度とは冬籠りするときの食料のことです。人間社會は幾ら貯めてもためても飽くことを知りません。其處にゆくと蜜蜂は賢いものです。冬越の支度が出來

ればそれで安心します、決してそれ以上求めようとはしません。人間はその祕密を握つてます。可い加減蜜が巣内に溜れば、夕方彼等の眠りにつく頃、ソッと失敬して貯蜜を持出します。彼等は翌朝になつて蜜の皆無なるを知り大騒ぎに慌てます。是ではならん、大變だといふので、又々一生懸命採蜜に稼ぎます。然うして溜まれば、又人間に持出されて了ふ、何のことは無い賽の河原の石積地藏のやうです。ですから幾ら稼いでも追ひつきません。「稼ぐに追つく貧乏無し」との言葉は彼等にとつては、そらごと、たはごとであります。

可愛さうに懸命になつて貯藏した蜜も斯うして人間に掠奪されては堪つたものではありません、隨分人間は旨い味を知つてゐます。朝から晩迄營々と勞働させて置いて、難有うとも何とも云はず無斷で失敬して了ふ、是では人間は、バルチザンの同類だと、蜜蜂から非難されても仕方がない、しかし、人間は重寶な言葉を有つてゐます。「蜜蜂は人間に蜜を提供するのが役である」と。成程人間から見れば然うかも知れませんが、彼等の方から見れば之は飛んだ濡衣です。悲しい事には蜜蜂は自分らの權利を主張する言葉を有ちません。私は其の事

を想ふと巣箱より貯蜜をとるときどうも默つてとる事が出來ません。

「おい、兄弟——勘忍してお呉れ、お前達の勞働で私達は何不足なく生きてゐるのだ。養蜂とは飛んだ事だ、蜂樣に私達は養はれてゐるのだ、忝けない事だ。だが兄弟此の冬は充分溫く越冬の出來るやうに支度して遣るから赦してお呉れ。南無阿彌陀佛」

斯う云ふ態度で念佛でも唱へてやらん事には何となく氣が濟まない。實に人間程横著な奴はありません、蜜蜂から上等の蜜を掠奪して置いて、彼が冬越の食料としては、砂糖蜜や或は飴に少しばかりの蜂蜜を攪ぜて、それを蜜のやうに見せかけて彼等にそれを呉れます。でも蜜蜂は何とも言ひません。默つて變てこな人造蜜を嘗めてくれます。決して不味いとか、喰へないとかと云ふ呟きも不平も申しません。斯うした忍從を思ふ時、私達は平氣で彼等の生產した蜜を嘗める事が勿體ないやうに思へます。

六　蜜蜂の智慧

蜜蜂は中々智慧者であります。

慾じひ人間など迚も叶ひません。飼養者の都合で時々巣箱を他に移すことがあります。そのとき蜜蜂は巣を出て、新位置をよく覺えたのち飛翔します。分封の時も然うです、殊に幼蜂の始めて巣外に出る時は、幾度も〳〵わが家の位置を見極めた後でなければ飛びません、一度位置の記憶がつけば最う安心して何處へでも採蜜に出かけます。

彼等は誰れからも敎へられはしないが「最少の勢力を以て最大の效果を生む」といふ經濟的法則をちやんと辨へて居ります。その證據には、多少の材料と最少の勞力とを以て巧みに自分たちの棲む巣を造營するのではありませんか、殊にその六角房の如き、實に巧妙なもので餘程幾何學的の智識がなくてはあれほど迄緻密に堅固に裝飾的に造巣するわけがありません。と云つて蜜蜂は何も學問した譯ではないでせうが、自分達の衣食住の事は皆自分達の手で生產してゆく立派な獨立者であります。更に驚く可き事は分業制度の如何にも整然と發達してゐる事です。育兒、建築係、勞働專門、敵への防禦、蕃殖、衞生係、衞兵等それ〴〵の分業制度に依つて、一絲亂れず、少しの錯誤もなしに保たれてゆきます。例へば一疋の蜂が野外から花粉を採つて戻れば、他の一疋がそれを受取つて巣房に塡充する、と云つたやうな

わけで分業制度が如何に彼等の生活の上に必要であるか、彼等はそれを生れ落ちるから意識して居ります。彼等は分業制度の最も能率的にして、それが團體生活に及ぼす影響の如何に大なるかを、誰から教へられたとも無く、ちやんと識つて居ります。

又蜜蜂ほど天變事變を敏感に豫知するものはありません、それは恐しい程です。

風の無い靜かな日でした。野外には相當に花も咲いてゐるのです、然るに什うです、一疋だつて勞働に出る蜂は無いぢやありませんか、私は不思議におもつてゐると、大變！　三十分經つかたたない内にひどい嵐が遣つて來ました。恐しいものです。又採蜜に出かけた時、途中で雨にでも降られた場合には、一時葉蔭に憩ひ晴れるを待つて巣に戻ります。

又聖母蜂（女王蜂）が老衰し、或は亡失した時などは皆寄り集つて王座を築き、新しい王を求めることを知つてゐます。

私は以上の事實を考へて、如何に蜜蜂が智慧を有し、又それを巧みに働かしてゐるかが解るやうな氣がします。人間は彼等を指して、虫けら奴、下等動物と申します。ああ下等動物

だと嘲けらるゝ蜜蜂の生活が、却つて人間の生活に多大の教訓と含蓄に富める暗示とを與へて居ります、可い皮肉ではありませんか、私はクスクス笑ひたくなります。

七　蜜蜂の感情

どんな動物でも感情を有たない動物とてはありません、殊に下等動物になればなるほど理性の發達が鈍くなつて、感情の方が却つて旺盛になつて行くやうです。淨められた纖細な感情か、又は粗雜な荒々しい感情が本能の奔る儘に委す狂的感情か、どちらにしても動物の大多數は理性と云ふよりも、寧ろ感情の方が、生活に多く織り込まれてゐます、蜜蜂のやうな極端に團體生活に執著を有つた昆蟲にあつては、巣内の同族に對して異常なる愛を有つことは今更言ふまでもない事です。

一日、巣箱の前にあつて彼等の活動振りを眺めてゐました。すると野外から戻つて來た一疋の蜂が、何うした機か巣門の外に轉げて落ちました、此の有様を見た番兵の蜂が早速出て來て之を援け起して、一緒に巣へ伴れて入りました、斯うした友情をながめる事に、誰が心

の打たれないものとてありませうか、餘りの尊さに私は思はず合掌して拜みました。

八　蜜蜂の喜怒

蜜蜂も動物です、決して神様でも佛様でもない、愉悅な時には笑ひ、癪に障る時は怒りもします。悅ぶ時は一種異様な表情をする、それは卽ち尻を上へあげ、からだを熟つとして翅を振動すること數分！　此の狀態が最も蜂自身にとつては大歡喜の時です、

聖母の姿が見えなくて困つたとき、何處かで發見した場合、或は巢門の閉鎖が解放されたとき、永い冬が去つて新しい春が訪れた時、斯うした喜ぶ態度がはつきりと見えます。又連日降雨のあとで、カラリと空が晴れた場合などは、傍で見る目も可憐らしい程彼等は悅びます。是に反して怒る時は、多くは彼等の安定を脅されたときです、その時は尻をあげ、翅に力をこめ、觸角を立て、眼を聳てゝ、輕く歩みつつ、螫針をチクチク顫はしながら、四方を覗ひ廻します。又ひどく憤怒した時は鋭い啼き聲を發します。然し乍ら、元々蜜蜂は溫柔な性質ですから、彼等の生活を脅さない限り少しも怒りません、殊に花時の勞働に忙しい時な

そは、少々手荒い扱ひをしてもさのみ怒りはしません。尤も時季によつて大いに差があるわけで、早春のころと晩秋の頃、冬季蟄居の頃などが一番怒り易いやうです、時間で言ふと、朝と夕方が激し易く晝の溫い時は樂なものです。それに蜜をお腹に充分含む時は怒る事が至つて遲いのです。分封の際怒るのが稀れなのは、蜜を澤山に吸收してゐるからです。一體蜜蜂はお腹に蜜を滿たした時は、不思議にも怒らないものです。之は敢へて蜂ばかりではない、人間でも空腹の時は滿腹の時より感情が敏感になつてゐます。卽ち激し易いやうです。蜜蜂が滿腹した時に、餘り怒らないのも斯うした理由があるからでせう。

すべて外敵を見出した時は屹度飛付きます、怒りが激しい時は例の螫針を使ひます、しかも、一度螫針を用ひたら最後、彼れは自分達の生命を失ひますから滅多には螫しはしません。

九　蜜蜂の言葉

何萬といふ蜂群の中で何うして彼等は自分の意志を對手に完全に傳へ得るでせうか、私は微妙な彼等の動作を觀てゐますと、それはく實に巧みに滑かに意志の交換が、行はれてゐ

ます。

意志の交通は例の二本の觸角で以て果します、然しながら、觸角ばかりでなく、巧みなる表情とその聲にも負うてゐます。

蜂の發聲は一樣ではありません、主に翅の振動から發する聲と、お腹の環節の迅速なる運動と、もう一つは氣孔より發するものとがあります。試みに外部から巣箱を輕く叩けば、巣内では一齊に警戒の聲を發します、その聲は恰度「ぶむう!」と唸るやうに響きます。又同族を呼ぶとき、怒る時は、その聲が鋭く悲しむ時、不滿なるときは、その聲細く淋しい。是と反對に滿足怡悅の時は、こゑの發聲は柔かに靜けく聞えてゐます。のんびりと、いかにも閑かに、

凡て群集性を帶びた蟲類は一般に聽官が發達してゐるやうです。此の音聲を聽き分けて、それ相應に處置を施すやうになれば慥かにその人は蜜蜂に愛される人です。斯う云ふ人は屹度管理に成功します。何となればそれらの經驗は多年の實驗を積まなくては解らない事ですから、たゞに實驗のみでは不可ません。本當に彼等の生活に愛と理解とを持たなくては、之

ら昆蟲の神祕な祕密は解りやうもありません、單に彼等の外側だけ解つたやうでも、内部を識らねば結局それは駄目である。誰でも心から愛を有つ者には、蜜蜂は悅んで自分達の棲む神祕な世界を展開して呉れます。

十　蜜蜂の記憶

蜜蜂の記憶の確かな事には驚きます。

自分の實驗に據ると、一度蜜のあつた處は必ず忘れずに覺えて居る、いつであつたか、窓の隅へ僅か一勺程の蜜を皿に盛つて置いたところ、十分間の後にはどうでせう、澤山の蜂が唸りながら群集してゐました。そのうち秋も過ぎて冬眠の頃となつた。

蜜蜂は寒くなると絶對に外出しない、巣房に蟄居して靜かに春を待ちます。が翌年の春菜種の花が咲くころ再び蜜蜂は窓際に群集して騒いでゐました、熟と見てゐると、去年の蜜のあつた場所でも探すかの如く例の觸角をピョコつかせながら嗅いでゐました。

蜜蜂には人を識別するの能力を備へてゐる。決して自分達の飼主を忘れませぬ。

「牛はその主をしり驢馬はそのあるじの厩を知る。」と、併しながら蜜蜂は牛や驢馬以上に飼主を覺えてゐます。感心なものです。

昆蟲學の大家松村松年氏の實驗によると、「蜜蜂も初めて生れた者は巣に殘りて、先輩に色色と教はり又は指導をうける、蜜蜂が花や又は蜜のある處を覺える理由は、香氣やその色彩に誘引せらるるからで、又それらの蜜や花粉を發見するの方法は視覺の記憶と嗅覺の記憶の兩者に歸因する、又その仲間を認識するの方法は嗅覺の記憶によるもので、臭氣にも個體的のものと又家族的のものとがある、家族的とは一女王より生れた子孫に共通の臭氣であつて、此等は皆何れも記憶に據る」といはれてゐます。

十一　女王蜂

若しも基督教神學で云ふやうな父子聖靈といふ三位一體說を信じなくては、人間は救はれぬと言ふならば、蜜蜂の世界に於ても、女王蜂勞蜂雄蜂と斯うした三位一體を信じなくては

（いゝや。信ずる信じないと云ふやうなまぬるい事ではない。絕對的に三位一體が必要なのだ）彼等は彼等の生活の神祕を私達に展開しては呉れません。又蜜蜂自身にしても、三位一體のどちらかゞ失くなるやうな時は、卽日彼等が王國の運轉は停ります。そして全群は離散か若しくは自滅といつたやうな悲壯な狀態に陷ります。で、彼等は女王蜂勞蜂雄蜂と、斯うした三つの者が、それは〳〵見る目も羨しい程仲よく平和に相愛してゐますが彼等の目的（目的といふよりも寧ろ先天的本能）たる種族の保存及び蕃殖に反對し、若しくは邪魔になるやうな行爲に出會す時は忽ち巣外に放逐するか、さもなくば嚙み殺して了ふ、情けない事です、何と言つても其處は蟲です。あゝ、しかしながら蟲よりも神に近い人間樣が、厭らしい事を平氣でなさる。おもへば、人間よりも蟲の方が私は好きだ。

「何ぜ？」と。

訊ねて下さるな。まあ、御覽なさい！

愛しますと云つた淨い口から、まるで嘘のやうな

憎しみと呪ひが炎々と燃えあがり

たつた今、熱心に祈つた掌で、直ぐと——穢らはしいことを平氣でする……

思へば、あゝ。遙かに昆蟲の世界が、どれほど私にはなつかしいことでせう。

女王蜂（クイン・ビー）！　何んといふ、きらびやかな魅力のある名でせう！　斯る美しい豐麗な名を聞いたゞけでも、世の空しい憧れを追ふ女性達を蠱惑させるに充分です、一蜂群の中でも、さすがは女王（クイン）である。彼等の仲間では一等優れた地位を占めてゐます。その筈である、繁殖といふ重要な使命を帶びてゐるので、蜂群の内では堂々たる待遇を？　本當に人間に比しては最上級の厚遇を享けてゐます。享くるに値する創造を惜しみなく續けてゐます、このことをおもふと、

ああ！　惠まれざる人類の母性よ！

と、私は戀へ度くなる。私は蜜蜂の母性を想ふ時に惠まれざる人類の母性の上に、暗然として私は泪を流がす。その虐げられし暗いさだめを、おもへば想ふほど。——話は再び後に戻つて、遠がは蜂群中の女王であります。と私は讃美する、言までもなく。溫乎で莊重な蕭々

としたその態度（スタイル）は女王としての地位を辱しめません。

天氣の朗かな日、紫の光が降るやうな晴々しい五月の午前、みかんや、オレンヂさてはネーブルの花の香りがぐんぐんと、養蜂園の一帶をこの世ならざる薫園（パラダイス）と化します。おお！その香りを嗅ぐと私は危なく卒倒するやうだ。あまりに惠まれが、豐かなのに私の魂は愕いたのです。此の晴れた綠のあさに、巣房を覗くと

何うです、その素晴しいこと何萬といふ勞蜂が整然と沈默の勞役をやつてゐます。まるでトラピストの修士のやうに

或は祈つてゐるやうに跪き
或は愛のキスに醉うてゐるやうに抱擁し
或は聖子（キリスト）をあやしてゐるやうに覗き込み
或は厨房の御馳走に花粉を練り
或は巣房の建築に蠟を運ぶ

皆がそれ〴〵熱心に勞いてゐる、その有様を一瞥しただけでも、私達の仕事の怠慢さを何んなに恥しくおもひます事でせう。或日のこと私がその勞蜂の仕事を眺めてゐると、俄かに彼等の仲間では騷々しくなりかけて來ました。

何か？　と仔細に眺めると、おゝそれは女王の巡視ではありませんか、熟つと見てゐるとその歩き振りの鷹揚さ加減、肅々たるその威儀、その神聖、幾多の侍衛蜂を左右に侍らせながら、御自分の產み落されたる幼な子に一々挨拶を交はして往く狀況などは、遺かに立派なものです。殊にその衣裝ときては、うすものゝやうな、かすみのかゝつた金砂の翼を靜かに顫はせつゝ、赤い胴衣に黃金の冠り。星のやうな碧い瞳が、柔かに凉しく微笑む。而も二本の觸角が全蜂を一々祝福でもするやうに、大きくまあるく圓を描く。おゝ、その華麗よ、瀟洒よ！　殊に私の愕いたのは、瀟々と歩行する際にも、女王たるの威を毫も失はず、而も床しい敬虔な、淨らかな、姿全體の表情は、噫！　全蜂群中のイルミネションであると謂つても、誰れか、此私の過言を責める丈の勇氣がありませう。

殊に、ゴールデン、イタリアの女王蜂と來ては、全く文字通り金光りのする、餘りに勿體なうて、私は現實にゐながら、ソロモンの榮華の極みを、坐ろ聯想させられます、と云つて何も女王蜂の生活は野の百合の一つだに及ばざる、といふ程俗惡なものではありません、否、或意味に於てはその反對に、野に咲く百合の花も企及し得ざる聖い生活をなしてゐます。

その愛を見よ
その忍從に倣へ
その純淨を模せ
その敬虔を拜め

あゝ。まことに彼女は昆蟲の王であり靈蟲であります。と謂つて無暗に感傷的な言葉を弄する事は私の意ではありません。假令女王蜂と謂へど單なる蟲けらに過ぎません。

一被造者（モータル）です。モータルの分際として神に等しい頌榮を贈くる事は、却つて私が彼等を辱しめる事になります。で私は今度、女王蜂を別な方面から觀察して往かうとおもひます。

若しも、あゝ若しもです。巣内に女王以外に新しい女王でも出來て御覽なさい、御姫さまのやうな優しい女王蜂が。今迄とは打つて變つて恐ろしい夜叉の相を現じます。

おゝ、その凄いその見幕、迚も二度とは見られません、直ぐとその對手たる新女王蜂と格闘して是を嚙み殺さなくば止まないほど、猛烈な嫉妬心が潜んで居ります。しかし、此嫉妬心か敵愾心？　は老いるに隨つて消滅して往くやうです。私の實驗した處に據ると、交尾前の處女王蜂が一番憤怒の念が激しいやうです。おゝ、死のやうな強い力を有つ妬み心よ！一切を傷けずには已まない鋭い力が隠れてゐる。

それは嵐だ！　それは暴風だ。

面白いことには女王蜂の容貌や其スタイルが、美しければ、美しいほど全群の能率があがる。反對に醜いとなると、あゝ、氣の毒なほど暗い、陰慘な氣分が、全群を蔽うて、勞蜂の唸りが挽歌のやうに聞える事は、本當に什うしたわけか。昆蟲と謂はれる蜜蜂ですら美を好む。美を好むといふ事は、ひとり人間のみの感情ではないやうです。凡ゆる自然萬象が美を愛する。光を愛する。其處に、おゝ！　其處に地上に產れた凡てのものゝ歡嬉が浪のやうに

あふれます、

おゝ！　美とよ。

美とは調和だ調和は美だ。してみると私達の棲んでゐる世界が、調和でなくてはならないのに、是はまあ！　什うした、不調和であらう。呆れます。ほんとうに。あゝ、蟲ですら調和を焦れるやうに慕ふのに、況して私達人間が、全生活に亘つて調和を！　おゝ戀人の如くに慕はずには、ゐられないではありませんか。

女王蜂の職務は產卵にあることは言ふ迄もない事です。全蜂群は皆女王の產出に係はりますので、女王は蜂群を管理する君主と云てもよい譯です、が仔細に眺めると女王はまるで慈母のやうです。決して自分が君主たるの權利を主張しませぬ。否、他蜂に使はれる事をもて怡怡として滿足して居るやうです「人の頭たらんと思ふ者は人の僕べとなる可し……」と。云つたキリストの言葉は、ちやんと女王は生れながらにして實行してゐます。本當に感心ではありませんか、ですから斯る慈母のやうな女王が存在してゐる内は全群益々榮えて遂には素

晴しい强勢となります。さうなると「蜜」はいつの間にやら巣房に充實し管理者をしてその貯蜜の豐富なるに吃驚りさせます。しかし此吃驚はほんたうに悦ばしい吃驚です、忝けない哉。あゝ、慈母(マドンナ)の愛よ。

女王蜂よ！　あなたの淨愛こそ私達人間の求めて已まないものです。さう言ふ聖淨な愛をあなたに見出さなくてはならぬ程人間は愛に飢えてゐるのです。

女王は生れてから約二週間の後には交尾に出掛けます。交尾の日は天氣晴朗無風にして、午前よりも午後二時ごろが多いやうです、而も雄蜂の外出の繁きほど女王は促(いざな)はれて巣外を光を浴びて亂舞する、女王外出のときは澤山の雄蜂が護衛しつゝ大空に飛翔します。是は若しも外で小鳥などに啄ばみ掠られては一大事ですから——と言ふのは女王の身體は勞蜂に比較して二倍もありますから餘程目立ちます。

時とすれば雀やつばくらめ又は其他の小鳥に捕食せらるゝ憂目があります、さう言ふ意味で是らの雄蜂が護衛するのでせう。そして數千尾といふ雄蜂が一尾の女王を圍んで空中へ飛

翔する光景は實に素晴しいものです。其處で他の巣房の雄蜂が此の女王の外出を見てその結婚の光榮に預らんとする狀態は、まるで獅子を野に放つたやうでその唸り聲のもの凄いといつたら、お話する事も出來ません。あゝ性慾は動物の本能とは謂ひながら、それが露はに現はれる時私達は却つて淺ましい氣がする。

然し女王蜂は決して己が同族とは交尾しませぬ。若しも同族と交配するやうな場合は種族か非常に退歩します、彼らは自然と同族交配の忌むべきを識つてゐます、それ故、況してお のが同族の雄蜂とは交尾しない。

交配するときの光景は女王自身いと高く大空に飛翔する、雄蜂は是に伴うて同じく舞ひあがる、其處で一番高く舞ひあがつた雄蜂に對して、女王は自分の體を對手の雄蜂に委すのであります。此の選ばれし幸福な雄蜂は交配の濟むと同時に恍惚して天壽を終る、それは尾端が拐れて了ふからです。そのとき女王の尻に白い絲のやうなものが附着してゐたら、それは無事交配を了へた徵しで、此白色絲のやうなものは卽ち雄蜂生殖器の一部なのです。そして

此の生殖器の一部は女王が巣に戻つたとき勞蜂によりて取り去られるか、又は女王自身の顎で是を拔きます。

吃驚することには女王が一度の交配で約二億の雄精を享けるといふ事です。そして、たつた一回の交配が最始で又最終なので、此の點は他の動物と異つてゐるやうです。

女王が交尾のため外出して巣へ戻つて來る時間は平均一時間位なものであるが、外出の初日は早い、がだん〳〵と繁く外出するやうになれば、隨つて時間も遲くなります、私の實驗したところに據ると、三十分位が平均時間のやうです。それから交配を遂げた女王は廿四時間を經てから、ぽつぽつお產を始めます。遲いのになると五日位延びる位のもあります。一見して腹部の膨れた徵候は產卵(クリスマス)の知らせで、それは又彼らの上に臨む神の祝福でもあります。女王の生殖器能が不完全であつたり、或は交配時に連日雨天のやうな時には、已むを得ず不自然なる產卵を始めます、而もその生むところの卵は悉く雄蜂となつて現はれるので、勞蜂は非常に是を厭やがり、遂に幼蟲は勞蜂の虐待をうけて、巣外に放り出されるか又嚙み殺さ

るゝ樣です、然し斯う言ふ事は稀有な現象です。滅多に惹るべき筈なものではありません。

それから產卵の狀態です。

女王は早春から初夏にかけて又晩秋の小春日和といつたやうな時候のよい時盛んに產む、然し何んと云つても春から夏へかけて四、五、六月の三ヶ月が一番多く產む。

產卵の順序は卵が蛆となり蛆が蛹と化り、蛹が成蟲と變化する。產卵より飛翔の充分に出來るやうになるには、女王蜂に在つては十五日位、勞蜂は廿一日、雄蜂は廿五日位を要します。然し之は確かな統計では無い。極く概略のところを計つたに過ぎない、その時の季節の具合巣房の境遇とによつて遲速のあるは當然で一概に一律することは出來ないと思ひます。先づ平均して女王蜂ならば卵時代が三日、蛆時代六日、そして休眠が二日、蛹時代が五日で約十五六日目には一人前の美しい女王(クイン)と成るわけなのです。

但し一つ茲に面白い事は女王が勝手に勞蜂や新女王や又は雄蜂を產む事の出來るといふ事です、それは勞蜂や女王を產む時は受精卵より雄蜂を產む事は不受精卵より產みます。斯く

の如く勞蜂と女王とは同性の卵より產むものでありますが、その勞蜂となり女王蜂と變化してゆくのは何に原因するのでせうか？　それは孵化三日後、食餌の相違から來るのであります、卵それ自らには何らの變化も無い、しかし勞蜂が次の時代の女王を欲する時は「王液」と稱する一種特別の食餌を、それは丁度ミルクのやうな粘液を供給するのです。供給されし蛆はそれを食すると、自然に女王のスタイルを備へつけて來るやうに出來てゐます、何と摩訶不思議な事ぢやありませんか。

勞蜂が女王を養成するのを熟と見てゐますと、それは實に非常な緻密を以て庇つて居ります。王液と云つた特別な食餌は、勞蜂自身の頭の先きの唾線狀より分泌せらるる白色粘稠的な滋用液で、之を食する幼蟲はやがて選ばれたるクィンとなるわけです。が勞蜂と雄蜂との食餌は蜜と花粉とを以て養はれてゆくのです。

女王の產卵力は第一年第二年はまことに旺盛である、しかし第三年頃になれば最うそろそろ下り坂で人間で謂はゞ五十歲過ぎの姥櫻と言つたやうな具合で甚だ以て振ひません。初期

の間は一日能く三千以上の產卵をします。實に驚く可きものです。產卵の旺盛なる程隨つて壽命も短いので、まあ平均して四年半位なものでせう。

それも自然死では無くて不自然な死に方です。と言ふのは最う女王の產卵力が下りかけであると見るや勞蜂は第二の新女王を養成して之に代らしめる、そして舊女王は巢外に驅逐して了ふが大方は女王自ら自己の運命を悟つて？　自知して？　自分で巢外に於てクレオパトラのやうなロマンチックな死に方をする。噫！　悲慘なる女王の晩年？　自分は斯うして死んで往く女王をみると涙なしにはその亡骸を埋めてやる事は出來ません。然しながら勞蜂のため嚙み殺されるやうな場合は殆んど無いと云つて差支はありません。自分の實驗に依れば新女王と鬪爭して斃死する場合が多いやうです。おう、華かな女王の晩年の悼しい事に私は覺えず寂しい氣持がする。美人薄命とはよくも穿つた言葉です。けれど老衰して醜い死屍を殘すよりも、花々しく新女王と格鬪して斃ふれる事は何んとなく悲壯な感じを與へる。却つてさう言ふロマンテックな斃れ方が女王蜂としては相應しく私にはおぼえられる——。

乍然時とすれば一蜂群中に女王二頭共棲の不思議があります。現に私は此珍現象を約一ケ年餘り實驗したのです。面白いではありませんか、絶對に二王の存在を許さない蜜蜂の世界に於てすら、時とすれば斯る奇蹟がある。しかし之はさうザラにあるべきものではありません。

巣箱の蓋を開けて眺めると、二王は平和に協力して産卵してゐるではありませんか、斯う言ふ事柄は私にもその原因が解りません、最も斯る稀有な例外は、蜂群が豫定數よりも倍加してゐる時に限るやうです。小群だとすれば忽ち衝突が惹されて血を見るやうな慘劇が行はれる、そしてどちらかゞ一方斃死するに決つてゐます。

然し二女王共棲といふ事實は、さう長く續くわけのものではない。長くて一年短くて一ケ月位のものである。が舊王の方が産卵を停止した場合などは勞蜂は默つてうち捨てて置くやうです。何れにしても變則は蜜蜂の世界にあつては絶對に許され得べきものでは無い、但し人間は別なやうです、一夫多妻！　多夫一婦といつたやうな珍現象は別に人間界では問題では無いやうです、蜜蜂の世界をおもふと。

ああ恥しい事です。

十二　勞蜜と雄蜂

蜜蜂の社會を眺めると、實に羨しいほど仲間が愛し合ひ共同しあひ助け合つてゐます。

私達世界のやうに他律的な宗教とか法律とか道德とかいふ難しいものは見たくもありません、無い筈です、てんで必要の無いほど進歩してゐるぢやありませんか、眞實蜂共の生活は自然法爾です。彼等の生き方は無意識に宇宙大自然の方則に隨順して居ります。偉大です。實に驚異すべき偉大です。

御覽なさい、あの大太陽が赤赤とその勇姿を東の空から薄い雲を破つて地平線上に現はるころ、蜜蜂共は盛んなる歡聲あげて勞働に遠征します。そして太陽が一日の仕事を了へて再び西の彼方に沒するころ、平和なミレーのアンゲラスのやうに蜜蜂も又巣内にありて沈默の涅槃に一同が靜かに靜かに這入つてゆく。

おお、自然生活者蜜蜂よ！

自然を壞すことをもつて文明と思うてゐる世の中に自分は卿等の生活を通して如何に敎へらるるか、如何に學ぶか、迚も此世の凡ゆる博學達識の士も斯くばかりは深切に敎へ導ひては吳れないだらう、而も卿等は體現の眞理を默々のうちに示して吳れる、ああ憶へば勿體なうて自分はひたすら讃嘆する外に術のない事を思ふ——。

華やかな春が霞の中から現はれて踊る
花が笑へば嬉々として
蜜蜂もぶーんと、伴奏します。
それから
おゝ寒い冬が來て銀のやうな粉が天から落ちる頃
草や花は來ん春までへ眠りと靜かに憩ふ
蜜蜂も又冬眠の悅樂に團樂をよろこぶのです。

蜜蜂の仲間では、何と云つても勞蜂が全群の九分九原まで勢力を占めてをります。その筈です、衣食住の供給者ですから無理ではありません、と云つて人間達のやうに勢力を利用して威張るなんて云ふ馬鹿な蜂は一尾だつてゐません。感心です。

勞蜂の職務はざつと七つほどあるやうです。

一、蠟の分泌
二、巢房の造營
三、幼兒の養育
四、花粉及花蜜の採取
五、害敵への防禦
六、掃除及煽風作業
七、女王への侍衛

此の七つの仕事は蜂群全體の生存上最も重要なもので、彼等は各々分擔して規律よく勞いて居るやうです、然し老幼の差によつて執る仕事も變つてゆく。オオ、分業制度の能率上に

及ぼす影響の極めて大なる事は、人間に敎へられずとも賢い蜂共はちやんと識つてゐます。

さて私は蜜蜂の飛翔力に就て一言語らうと思ひます。

蜜蜂の翅は他の昆蟲に比較して至つて强靱なもので、花を訪ねて飛翔する力は三哩或は五哩位だと一般に云はれて居ります。然し私の實驗に據ると、平均二哩位が一番確かなやうです。勿論私の實驗した蜂はカーニオランとゴールデン、イタリアの二種です。米國に於ける養蜂の大家ルート氏の報告に據りますと十英里を隔つる處から、一日六回採蜜して戻つて來たといふことださうです。

花に止つて採蜜してゐる時間は平均三十分内外で、蜜を吸取するとお腹が著しく伸びて明るくそして黄色の體輪を美ごとに現はします。

私達が舐めるたつた一匙の蜜は勞蜂にとつて三日位の勤勞を要します。

それを思ふと甘い旨いからつと云つてああ無暗に舐める事は勿體ないやうな氣がします。

自分は先きに女王蜂が産卵すると謂ひました。然し産卵は蜂の社會にあつては女王蜂のみではありません、勞蜂も又産卵します。が勞蜂の産卵と女王蜂の産卵との異るところは、勞蜂の産卵は悉く雄蜂を産み、女王蜂の産卵は勞蜂を産み出す點にあるのです、元來勞蜂は中性昆蟲の一種で貯精嚢を有つてゐるので産れて來るものは皆不完全な雄蜂計りです。

さうでせう性的結合に據らざる産卵ですから。

女王蜂は一房に一卵つつ正しく規則よく産みつけます。是に反して、産卵勞蜂は一房に五つ六つ不規則に産みつけますから直ぐと解ります。斯うした不幸な境遇に生れ出た雄蜂は他の勞蜂に依つて嚙み殺されたり、又は自ら死亡致します。

産卵する勞蜂は老勞蜂に多いやうです。

什して勞蜂が産卵するか？

是には深い仔細が潛んでゐます。

その仔細と言ふのは、巣内にゐる唯一の女王蜂が死んだ時とか、或は女王蜂が處女王であつて未だ一回も交配を遂げない爲に、勞蜂は是を看て悲しみ、遂に子孫を殖さうとして中性的性質を帶びてゐる勞蜂自らが産卵するといふ不思議な現象を呈するやうになります。

斯る不自然な産卵狀態を告げた蜜蜂の王國は早晩全群もろとも滅亡の悲運を招きます。自分は過去に於て斯うした經驗を嘗めました。

其時、直ちに受精せる新女王蜂を巣へ入れてやつたら、如何です僅か一時間後には勞蜂の産卵がバタリと止んだではありませんか、そして淋しさうに見えた全群が、活潑に勇しく愉悅に充ちあふれた狀態を呈して來ました。

自分の未だにその時の光景が眼にちらつきます。自分迄が快悅な氣持に溢ふれた樣です。

あゝ、女王蜂のみ産卵すると思つてゐた自分は勞蜂の産卵に依つて深い因緣を學びました。

如何にささやかなる蟲けらと雖も、おのが一族の繁殖の途が斷たれた時は、假令不完全な幼蜂を産み落しても數と云ふものに據つて滿足と慰安とを感ずると云ふことを——。

凡てさうです。

『一人ゐて悅べば二人ゐて悅ぶものとおもへ』と、云はれた親鸞の言葉、おお悲しむ時にも、ひとりより、ふたり、さんにん、數の多いほど悲しみはうすく、歡びはふかくなるものであります。ですから蜜蜂が一族の多からん事を希ふ心持は自分にも善く解るやうです。其の數が一ぴきでも多ければ多い程貯蜜に迄影響が及んできます。

汝ら互に相愛せよ——。

深い基督の言葉です。

私達人類も蜜蜂に敗けないやうに相愛の程度が高く深く昂つてゆくことを祈ります。

すべて社會的性質を帶びた群集性のある昆蟲には人間と違つて個性といふものが發達してゐないやうです。

すべてが共和的共同的です。

その原因は動物界と異つて蜜蜂の社會では、女王一尾雄蜂一尾といふ原則があつて他に是といふ生殖慾の競爭心が絶無なるためであります。さう言ふわけなものでありますから、た

つた一箇の女王蜂に對して犧牲的献身的な忠節をささげる、そして女王の外全部が生殖慾がないためは斯の恐しい嫉妬も惹(そ)らなければ、又異性爭奪の蠻行も惹りはしません。

雄蜂の使命は女王蜂との交配にあると前に述べました。單に雄蜂をして交配にのみ在在してゐるとは申されません。

巣箱内の溫度を適當に調節するに就ては勞蜂は雄蜂の存在に負ふところが多いのであります。女王蜂が産卵するに當つて調和した溫度の必要なることは言ふ迄もないことですが、是が溫度の供給者は交配以外に、何の用もないといはれてゐる雄蜂に依つて果されて居ることは面白い現象であります。

勞蜂が女王懷胎の事實を認めると、可愛想にも雄蜂は無用視されて厄介もの扱ひをされます、最後には驅殺される悲痛な運命に逢ひます。

勞蜂が女王懷孕を見屆け雄蜂の存在を無視して是を巣外に逐ひやる光景は、哀れにも無慈悲なものですが、やつぱり全群の存在の上から見て必要が無いのかも知れません。

驅逐された雄蜂は何の抵抗する事もなく從順に巣外に出て了ふ、そして空腹と疲勞のためはかない最後をとげます。

總じて母性を中心とする昆蟲界にあつては蓋し止む得ざる現象であります。

雄蜂の壽命は女王蜂との交配を了へて仕舞へば、その儘極めて平和なる大往生を（天壽）を遂げる、斯る大往生は稀有のことであつて大多數は勞蜂の虐待をうけて漸次衰弱を來たし遂に死にます。

勞かざるものは食ふ可らず。

此言葉は、蜜蜂の社會では完全に守られて居ます。而もそれが嚴重に勵行されてゐるところを見ると、如何に蜜蜂が怠惰を憎んで生産を尊んでゐるかが解ります。

什うです人間界は？　と若しも蜂どもに訊れたら、噫、人間は耻ぢねばならない。

アシジの聖者フランシスが
或時、怠け者の弟子を、雄蜂奴！　と云つて教團より逐ひ拂つたと言ふ事です。
實際、蜜蜂の中でも雄蜂ばかりは一回の交配が濟めば、あとは無藝大食で、他蜂の勞働を遠慮なく平氣で盜んで生きてゐる。役がすめば勞蜂に依つて啣へ出されることは痛快な暗示です。

蜜蜂の敏感なることは豫想以上です。
一寸でも可い、巣箱の外よりコッコッと、二三度拳で叩いて御覽なさい、忽ちの内に何百といふ防禦蜂が一齊に例のお尻を逆さまに、翅をふるはし、ぶむうーと一種異樣な發聲をして巣門へ整列します。
そして二三分間位同じ態度を構へて外敵を待つてゐるが、誰も來ないと見るや靜かに巣内へ退却して往きます。

十三　蜜蜂の食物

花と蜜蜂とは切つても切れない因緣で結ばれてをります。
丁度それは水と氷のやうなもので全く二つは一つであります。
植物の生殖作用は蜜蜂に依つて始めて成し遂げられると同時に蜜蜂も又花によつて大切な食料を得られる譯けなのです。
花は蜂によつて
蜂は花によつて
互ひに扶け合ふと言ふ本當に美しい友情です。
ですから、花の咲かない荒野には蜜蜂も棲みはしません。
それは單に蜂のみでは無い。私達人間に於ても花も笑はぬ寂しい冷かな生活には迚も安住し切れません。

よく言ふ事です。

雨天の續いた季節は果實の收獲が尠ないと——。是は植物そのものせいではありません。

蜜蜂は雨を厭います、雨ほどいやなものは蜜蜂にとつてありません。

雨が一寸でも降ると最う採蜜に出掛けませぬ。巣内に蟄居して靜かに晴れるを待つて居ります。

ああ、雨がふれば花は泣きます。

ああ、雨がふれば蜜蜂も惱みます。

私の實驗に據りますと凡て肉食動物は、自然と淘汰されてゆくやうです。

御らんなさい。強い肉食動物ほどその子孫が減つて往く。

そればかりではない、體力、生命、が與へられた自然壽命よりも短くなりつゝあります。

例へば獅子とか虎とか言ふ肉食動物は、だんだん其影が地上より減つて往きます。

是に反して菜食動物は、益々その種族が繁昌して保存されて往く。その性質も肉食動物よりも菜食動物の方が優しく溫順で、人間に親しみ易いことは極めて明瞭な事實であります。

昆蟲に於ても肉食昆蟲は自然とその跡を斷ちつつあるやうです。

植物を御覽なさい。

彼等は皆大地より供養されて天壽を全ふしつゝあります。露ほども肉の香(かほり)を知りません。

わが蜜蜂の主要食物は

花蜜、花粉、水の三種であつて偶には松の脂などをとつて來るやうですが、之は巣房の建築材料に用ゆるので食料では無い。

此の中でも、花粉は幼兒生育のために、又蠟を分泌するために必要なものである事は言ふを俟ちません。

巣房に出入する勞蜂の兩脚を見てゐると、練つた花粉が黄色く、まるで、美しい珊瑚のやうに密着してゐます。

花蜜は蜂にとつて米の米である事は今更執こく申す迄もない。

蜜蜂が花へ花へと訪問して餘念なく採つた蜜が腹部に收まると、直ぐ化學的な變化を惹しそれが旨い葡萄糖となつて蜜房へ貯められる。蜂蜜は普通の砂糖のやうに胃を傷める甘蔗糖とは違つて、如何に多量を食しても絶對に胃を害する事はないのです。然しながら、花であるから盡く蜜を收めてゐるかと云ふのにさうでも無い。

花に依つて、蜜を有つてゐるのと無いのとがある、それは人間が一寸外から見た位では解りさうもないが、蜜蜂は例の完全なる視覺と嗅感とによつて巧みに認識します。

私達は夏から秋へかけて咲くダリヤなぞを眺めると、その大輪な美しい妖艶な姿を見た丈でも、是はさぞ澤山の蜜があるだらうと思はれるが、事實は反對であの花は單なる裝飾花に過ぎないのです、何の香りも蜜もないたゞ花粉があるばかりです。斯うした蜜を有たない花は可なりあるやうです。

蜜蜂が採蜜に出掛けてゆく時に、決して單獨では行かないものです。

必ず二尾以上數十尾群をなして出かけます、試みに花の咲いてゐるところを御覽なさい、

屹度數尾の群れが共同して採蜜してゐるのが眼に付くでせう。

ひとり淋しく仕事するよりも

大勢で樂しく仕事する方が面白くて愉快です。

仕事の上にも

能率の上にも

あゝ、わが蜜蜂は生れながらにして

凡てを共同的に

凡てを相互的に

そして勞働そのものが渾然とした一個の藝術です。

勞働の藝術化——。

みつばちよ、ォゝ、私の蜜蜂よ

お前は教へられずとも
仕事をその儘遊戯三昧と化してゐる
お前の頭には聖者のやうに
淨い後光がさんらんとして輝いてゐるぞよ——

自分はお前の勞働三昧を眺めてゐると
頭は自然と下がる、拜みたくなる。

つぎには水です。
水は人間の生活にあつては空氣や光と同じやうに、無くて叶はぬものです。
水、空氣、光、三位一體です。
本當に尊い三位一體です。人間は此の三位一體を信じ、そして三位一體のために生かされてゐます。

而も、無くて叶はぬ此の尊い本尊は何人にも無代を以て與へられて居ります。
わが蜜蜂にとつても水は主要食料の一つです。水が無くては、どうする事も出來ません。
殊に收獲し來れる蜜の濃淡を調和する爲には水は大切なものの一つです。
巣房の乾燥を防ぐ爲にも水は重寶なものです。殊に可愛い幼兒を育てるには水が中心の食料となります。
燒くやうな夏、小川のほとりに無數の蜜蜂が蝟集するのは水を求める爲なのです。

不思議なことには
凡てに貯藏性を有する彼等が水丈に對しては決して、おのが巣内に蓄めようとはしません。
その筈です。水は年中豐富です。四季を通じて欠けるやうな事は決してありませんから。

我等の求める衣食住が、水や空氣や光の如く、無盡藏に而も無代で與へられる時代が來る
とすれば
戰爭も、國家も、政府も必要はなくなる。

おうおう、何ぜ我等は無盡藏に與へられないのだらう？
いいや、與へられてゐるのだ。
それを獨占してゐる怪物がゐる爲だ。
その怪物を國家が保護してゐる。馬鹿な話です。
噫。その國家が一體全體誰が護つてゐるのだ？
衣食住に惱む大多數の我等（プロレタリア）では無い矣！

玆に一つの愉快なる挿話（エピソード）がある。
それは熱帶國の印度であつた。

あらゆる花は四季を通じて、まるでエデンの園のやうに競ふて咲く。
一度び、此光景に接せんか何人も窒息を感ずる程それ程幸福が大きく深いのだ。
處が、或るアメリカの慾深き商人が此の盛んなる光景を眺めた。
持ちまへの性格は昂然と、彼をして花に醉はせるのではなくして、如何に此花を利用する矣を考へさせた。ヤンキー共のやりさうな事です。

よし、此處で一番ウンと養蜂をやらう——。と決心した。
さぞ豐富に採蜜が出來るであらう、よいものを發見した——と獨り微笑した。
其處で早速澤山の巣箱を仕込んで
莫大の費用を投じて出掛けたと思召せ。
件の商人は、花の咲いてゐるまん中へ巣箱をずつと一列に約三百箱程ならべた。
蜜蜂は巣箱から飛び出した。
見るからに色彩の强烈な花の周圍をぶんぶん唸り乍ら左往右往花に止つて採蜜しかけた。

商人は之を眺めながら

どうだい、俺の考へは旨いものだ——と舌をうちました。

ところが吃驚するぢやありませんか。

蜜蜂は蜜は吸ふが一向巣箱に持つて歸らうとはしない。愉快さうに飛翔しながら、腹が減ると花に止つて蜜を吸ふ計りで、とんと、巣房に貯めようとはしない

はてな——。と商人は首をかしげて考へた。

斯んな事ぢや無い筈だ、如何したのだらう？

其處でよくよく調べてみると

印度のやうな年中花が咲いてゐる處では蜜を巣箱に貯藏する必要が無い、蜜蜂はいつでも欲しいと思ふ時は、自由自在にとれる。春とか秋とかにしか咲かないものなら、貯める必要があるかも知れない、印度はさう言ふ必要は更に無い、丁度水や空氣や光と同じやうに欲しいと思へば、いつでも自由にとれる——。

アメリカの商人は此の事が解つて開いた口が塞らなかつたといふ事です。

一體全體、物を私有し所有し貯藏せようとする事は、人類の生活全體から眺めてよい事だらうか？

貯める者の神の國に入るは如何に難いかな　富める者の神の國に入るよりは駱駝の針の穴をとほるは反つて易し——。と

キリストは貯蓄の非なる事を叫んでゐます。

人間全體が貯蓄しなくなつて

明日の事を思ひ煩ふ事なく

神の國とその正義を求めるやうに

人間が進歩したら、もう占めたものです。

十四　分　封

蜜蜂の生活を觀察するに就て『分封』(俗に子別れと謂ふ)程自分達の興味を惹くものは無い。眺めてゐても實に悅びです。

自分は四月の花咲く、まッ盛りの時、時間で謂へば午前九時ごろでした。突然裏の巣箱の置いてある方角にあたつて喧騷な音がした。

さうすると此時けたゝましい聲で

分封、分封！　と云ふ叫びが私の耳元に達した。

ソレッ——とばかりに私は支度して巣箱へと飛んで往つだ。見ると、今や大勢の勞蜂が、ぞろ〳〵と勢揃ひして全群の約三分の一程巣門の附近を盛んに亂舞してゐました。

うれしさうに

樂しさうに

ぶんぶんと唄ひながら上になり下になりつゝ亂舞の最中です。

そして、女王の出て來るのを待ち構へてゐる樣子なのです。

おう、盛んなる光景！

いや、素晴しい光景！

まるで、一時に革命でも起つたかのやうに、

喧騷と

叫喚と

亂舞と

それらが一緒になつて

平和なる養蜂園の人達を吃驚させました。

ところが仔細にみると全群の半分は巣門に整列して、今や將に出て往かんとする一隊の蜂に對して、挨拶でもするかのやうに蝸角をペコペコと、動がしつつ見送るのであります。

ああ、送るものと送られるもの！

二種の蜜蜂が、可憐にも私の眼にうつります。

分封が始ると新王國樹立に對して敬意を表するつもりか、その時間丈は全群仕事を休業して、靜肅にして居ります。

最後に、女王が多數の侍衞を引率して出て來ます。是は舊王です。此の舊王が新しい王國を建設する爲に今迄營々と築いた巢房を見切つて出て行くのです。後に殘つた勞蜂共は新鋭の處女王を擁して、舊王の殘して往つて呉れた王國を引つぎます。面白い現象です。

此の遣り方は人間と違ふやうです。

人間は先祖代々家を繼ぐ、後生大事と家を護る。父親が子に一切を讓つて新しく家を造るといふ事は、今の社會では滅多に見られません、否、さう言ふ蜂のやり方を眞似た者は殆んど無いやうです。

どちらが自然か、考へて見たいものです。

分封の時刻は平均午前九時頃から午後二時頃までが一番多いやうです。

然し乍ら、蜂の方で今日は分封だぞ——と決めてかゝつても、その時刻に雨か風でも吹かうものなら直ぐ中止して了ひます。

分封の日和は空がからりと晴れて、少しも風のない時に限るやうです。

蜜蜂が舊巢を見捨てて新巢を築かうとする時、最初數尾の蜂が、新巢を營み得る適當な場所を探しに出かける、是は三四日以前よりちやんと企畫されてゐます、そして適當なる場所を探し當てれば、報告して愈々分封と決定するのです。蜜蜂は決してあてなく出家はしません。利巧な蟲です。

分封を決行する前に、まづお腹に一杯蜜を入れて二三日は斷食しても遠方迄飛び得るやう

にそれ〴〵支度します。

之は新住所を探しあてて、直ちに巣房を造營する爲と、もう一つは自分達の糧となる爲の準備なのです。

腹が減つては、いくさが出來ん、こんな事はちやんと蜜蜂も知つて居ります。

分封當日には、出てゆく蜂、あとに殘る蜂、誰が決めるのか、それは私も知りません、その當日は甚だ靜肅に莊重に敬虔です。

彼らの間に、別離の宴か、或は互ひに相擁して泣いてゐるのかも知れません。

何れにしても、悲嬉交々の感慨が、彼等をして、深い淵のやうな沈默に靜謐を堪えてゐます。

靜謐よ、オオ靜謐よ、あらゆる歡びも悲しみも、その極致は靜謐の無言のみが最上の表現です。

わが蜜蜂は、分封を將に決行せんとして、深い靜肅のうちに互ひを祝福するやうです。

死のやうな深い沈默の數分が過ぎると、やがて幽かに動搖が起りかけて來る。

靜かなる闇が曉方に近づく時、さらさらと微風が戔ましく地を這ふてゆくやうに、おう、巣内よりヴィオロン絃の幽かなる、嘆くやうな音の洩れ出づる時、

是ぞ　分封の序曲であります。

靜かに序曲が始ると、俄かに大ラッパ小ラッパ、大太鼓豆太鼓、騷然たる一大交響樂(シンホニー)が、山の崩壞したやうに一時にどつと起る。

さあ——。大變、巣内の騷音愈々急を告げて來ると、蜜蜂は群をなして巣外にどつと溢れ出る。

此時居殘る蜂は巣外にならぶ

そして手を振り足をあげ翅を鳴らす

まあ！　何んと言ふ詩的な光景でせう！

突如、大浪の押しよせしやうに一團の群蜂巣門に現れ出た。女王はそのまん中に交つてどつと空中へ飛翔する。

全部出てゆく蜂が出切つて了ふと、巣門に蝟集してゐたあとに殘る蜂共は、半分程空になつた巣内を奇麗に整理をします。

是が、蜜蜂の分封光景です。乃ち新王が出來ると、舊王は一切を新王に讓つて、別に新しく王國を築くのです、其處で私達は網か笊で分封群の樹に止つてゐる密集團をそのまゝ捕つて、別の人造巣箱へ入れてやります。決して怒りはしません、こちらに愛があれば——。斯うして年々その巣箱が增殖してゆく有様は丁度鼠の子が殖へてゆくやうな按配です。

十五　蜜蜂の敵

蜜蜂にも敵があります。

それは彼らの生活組織を脅すものを指して言ふ言葉です。

平和なる蜜蜂の社會を脅すものは、

雀、鶏、燕、雲雀、蛇、蛙、蜘蛛、蟻、黄蜂、巣蟲、虱、

比較的にゆるいのは、音響、煙、嵐、熱です。蜜蜂の群が小群な程うけとる被害も大きい、反對に大群なれば被害の程度も至つて微弱なものです。

ですから大群に仕立てゝやる事は豫防法の最良策です。

とりわけ巣蟲は恐るべき害敵である。

何ぜなら、彼らは巣房に寄生して花粉花蜜を食料として生きてゆく内部よりの敵であります。蜜蜂の是を恐れる事は一通りではありません。打捨てゝ置くと、巣房全面を蠶食して了ふ恐しい害蟲です。原因は巣内の不潔より發生する現象です。

それから、黄蜂です。

此の黄蜂(クマバチ)は蜜蜂にとつて全く抵抗する事も何うするも不可能な害敵です。一度此の黄蜂が來襲するや、忽ち蜜蜂の五六尾は嚙み殺されて了ふ、まるでタンクのやうな働きをします。何しろその體軀の偉大なる事は、普通蜜蜂の十層倍も大きいのですから堪つたものぢやあり

ません。

その力と云ひ、鋭き齒と云ひ、蜜蜂にとつては實に如何ともすることの出來ぬ代物であります、ああ、神樣は妙なものをお創りになりました。若しも是等の逞猛な黄蜂の五六尾が共同して來襲するならば、如何に大群の蜜蜂と雖も、憐れや暫時にして降參して城を明け渡さねばならない悲運に遭ひます。

養蜂者は此の惡蜂の來襲期をちやんと知つてゐます。重に黄蜂は山野に花の無くなつた晩秋の頃盛んに養蜂場目がけて突進して來ます。

現に私は一日中見張りして四十尾も撲殺した事があります。

殊に黄蜂が一囘に蜜を奪取する量は、勞蜂が平均十日間の採蜜を平氣で失敬して往きます。思へば憎い奴です。

其處へゆくと蟻などは大した害を爲す程でもありません。蟻の多くは蜜蜂の勞働の多忙な時を狙つて、こそこそと蜜を盜みに來る所謂空巢狙ひと云ふ格です。

蟻の侵入を防ぐのは至つて簡短です、巢箱の臺の四方に脚をつけて水を盛りたる器の中に漬けて置けば最う大丈夫です。

滑稽なのは蜘蛛です。

巢箱の近所に例の網を張つて終日氣味の惡い眼玉をギョロつかせて待ち構へてゐるが、蜜蜂は利巧なものです、いつも網をぶん——と蹴破つて平氣で戻ります。それを知らないで蜘蛛は破れた網を修繕にとり掛ります。

見てゐて面白いのは蟾蜍（ひきがへる）です。

夕暮れになると、大きな體（ぞうたい）を重さうに、のそり、のそりとやつて來て、口を大きくぱくりと開く、すると魔術師のやうに音もなくすうと二三尾の蜂が蟾蜍の口中にわけなく呑み込まれて了ふ、

然し斯んな例は滅多にありません。

殊に夕ぐれは蜜蜂が眠りに就く時分ですから。蟾蜍先生の散歩する頃は巢箱でみんな寢て

るます。

野鼠も時たま蜜の香りに誘惑されて泥棒に遣つて來ますが、ぶん——と例の一針を蜂から見舞はれると、野鼠先生眼玉を白黑させながら逃げて往きます。

雀は雛を育つ時か一番多く蜜蜂を捕食するやうです。然し是とても然う大した程でもありません。

石川五右衞門の辭世の歌ではないけれど、

やつぱり蜜蜂の社會でも泥棒がゐます。それは巢内に貯蜜の乏しい時、是れでは迚も冬越しは出來んと考へた時、善良なる蜜蜂も時とすると掠奪蜂に變化する事があります。

私は是を盜蜂と呼びます、

一旦盜みの味を覺えると中々やめられないものと見へて、今度は多數の仲間を伴れて、少群の巢箱へと掠奪に往く。不幸にして襲はれた方の蜜蜂が弱い時は、忽ちのうち 巢内へ侵

入されて、ぐんぐん貯藏の蜜を持ち去られて了ひます。是が三日と續いて御覽なさい、哀れにも全滅の悲慘です。

一度掠奪の味を占めた蜂は、容易にその惡い癖が直りません。斯う云ふ不良蜂が一群存在すると、他の善良なる蜂も是に襲はれる恐れがあるので意を決して焚殺の刑を宣告します。

考へてみると可哀想です。盜みは單に昆蟲のみの社會ではない、私達人類も、大なれ小なれどろぼうをやらない者はひとりだつてありません。空氣だつて日光だつて水だつて一體誰の所有ですか？ 國は正義の名に據つて强盜を平氣でやります。宗教家は神佛の名に據つて賽錢や淨財を懷に入れます。大臣は軍艦を飲み、議員はコンミッションをとる。先生は生徒を食ひ、資本家は勞働者の血を吸ふ、男は女を、女は男を盜む。嘘——敢えて盜蜂のみを攻めるわけには往きません。

蜜蜂のお話もまづ是位にして置きませう。

永遠の幼兒

日曜が來ると、朝から子供達が詰めかけて來る。そして、子供達は自分の家のやうに思つて遠慮なくどしどしと上りこんで騒ぐ。

あゝ、子供程單純で素直なものはない。自分は子供らの新鮮な氣分に接すると、まるで別な世界に呼吸してゐるやうな氣がする、難有いことだ。

□

或る日曜の日であつた。

自分はエソップの狐と兎の話をしてゐた時、誤つて斯んなことを滑らした。

『皆さん、あなた達は心をキレイに持たなくてはなりません……』と。云つたら、

『先生、心とは何んですか？』

自分はこの時程答に窮したことは未だ嘗てない、恐らく達磨さんと雖も返事は出來ないであらう。其處で自分は質問を發した女の子に詫びた。

『勘忍してお呉れ、自分も解らないのだから。』

『解らぬことを何ぜ言ふの？』

再び自分は大喝一聲を浴びせかけられた。本當に恐ろしくなつた。自分が子供にやり込められた事は生れて始めてだ。ウッカリした事を云はうものなら飛んだ目に遭ふ。然し斯んな事があるので樂しみだ。子供は善い先生だ。教へるといふが、實は事ごとに教へられ、導かれて往く。

是も或る時の日曜であつた。お話が濟んで供養のお菓子を子供達に渡すとき

『皆さん、私の話とこのお菓子と、どちらがよい？』

すると、女の子が平氣な顔をして直ぐさま云つた。

『決つてゐる、お菓子の方が可い……』と。噫自分が熱誠こめての話も、此駄菓子一個に及ばない事を知つて大いに苦笑した。

□

『何故ホトケ様はものを云はないか』と、子供が佛像指して訊いた。自分は説明に餘程苦しんだ。子供は人格的に凡てを觀ようとする。

『もの云ないホトケ様を何故拜むの？』

自分は困じ果てゝ沈默すると、子供は中々承知しない。子供にとつては路傍に吠ゆる犬の方がホトケ様よりも興味を曳く、子供の世界は徹頭徹尾現實である、然し又子供にとつては木の葉一枚落ちるのも驚異である。

『何故木の葉が落ちるか？』と、訊く。そして納得の往く處迄聞く、大人のやうに曖昧に濟まさない。

□

如何したら子供に好かれる？

子供好きな自分は斯んな質問をよく人から聽く、其處で自分はかう答へる。

子供に好かれる祕訣は、第一子供を尊敬する事、第二子供になること、大人——といつたやうな氣持を微塵も持たなくして、子供の友達となる事。恐らく一時間子供らと一緒に遊べ

る人は偉い人だ。

□

子供は一刻と雖も靜かにしてゐることは出來ぬ。凡て子供は動的なのである。

憂鬱な性質を有つ人は絶對に子供に好かれない。子供は明るい。華かな性質の人を好む。殊に天氣のよい日など室内にて敎ふるよりも、野外に出てともに遊んだ方が子供は非常に喜ぶ。子供達と一緒に遊ぶ事は中々至難な事だ。餘程こちらが馬鹿にならなくては。

□

實際子供達と一緒に遊んでゐると、幾らか馬鹿になるやうだ。然し子供と遊んで馬鹿になる事は尊いふことだ。

斯の良寛和尚などの子供と一緒に遊んだ逸話は涙の零れるほど忝けない、尠くとも子供から友達扱ひされることは非常な光榮で又名譽なことだ。

□

『先生遊びませうよ！』と、近頃自分は子供からあそびの對手に要求されるやうになつた。

此事は實にうれしい忝けない事だ、其處で自分にどんな用事が控へてゐても飛び出してゆく。

□

子供は自然生活者だ。

朝は雀の啼き聲に眼を醒して騒ぐ。夕方、お天道樣が森に隱れる頃になれば眠る。

大人は反對に十二時頃迄も起きてゐる、成長が鈍い筈だ。

子供の前には善人も惡人も地獄も極樂も無い。凡ての者を平等に觀る。尠くとも自分に好意を有つ者とみれば、對手がどんな者であらうと直ぐ馴染になる、然し子供は直覺に鋭い、何んな者でも子供の前には僞る事は出來ぬ、微塵でも不淨な氣持や、野心があらうものなら、どんな事をしたつて寄りつかない。恐ろしいことだ。

子供の動作は何んな詰らぬ一些事ですら、全力をこめて遣る。即ち眞劍勝負だ。熱とみてゐると全人格を賭してやつてゐる。

大人のやうに遊びの氣分は少しも有たない。

子供は自分の感じた事を表現する場合、言葉に非常な力を入れる。即ちアクセントが強い。

そして表情が全體に生々と躍動して來る。大人のやうに無駄な言葉は一つも吐かない。みんな魂のドン底から衝いて出る必然的な叫びだ、そして其は子供の詩だ。素晴しいポエムだ。恐らくホキットマンもブレークもミレーもロダンも子供の純眞な感情の前には、彼らの藝術も影を潛めるであらう。

□

子供の動作を熟と觀察してゐると、いろ〳〵と敎へられる。正に子供は大人の先生である。

自分は武藏野の郊外で日曜ごとに子供を集めて彼らから學ぶ事に努めてゐる。

□

ちかごろ自分は子供の一人からオテダマ、ハヂキなど敎はつて一生懸命勉强してゐるが、どうも旨くゆかぬ。けれど眞劍にオテダマやハヂキをしてゐると靜坐以上の無我境に這入れる。それに手毬唄の如何にも、ひなびて唄ひながらやつてゐると、お經をよんでゐる以上に、自分の心を淨め溫めて呉れる。斯んなよい藝術は外にありはしない。

□

子供と約束したらば、何んな事があつても實行しなくてはならない。若しも約束を無視しやうならどんなに言譯したつて毫も役にたたぬ。ウソ吐いたとなると子供は承知しない。此事に就いて自分は苦い經驗を嘗めてゐる。

いつであつたか、自分は子供と動物園を見物する約束をした。約束の期日は一ヶ月後なるため、すつかり自分は忘れて了つた。けれども子供達はちやんと記憶してゐた。その當日になつて子供達は嬉しさうに自分を訪ねて、

『先生動物園見に行きませう。』

自分は子供と約束した事をすつかり忘れてゐたので吃驚した。生憎その日は非常に忙しかつた爲、子供らの希みを充たす事は出來なかつた。自分は子供から信用を失つた。しかして信用を回復するためにどれ位自分は苦しんだか、殆んど想像以上である。子供の記憶にはすつかり參つて了つた。それ以來動物園行のことは決して口にしない。若しも動物園行を浮かと云はうものなら今度は、

『先生、それはホント?』と、慌かめてかゝる位いつ迄も欺れた事は覺えてゐる。全く自

分は恐ろしくなつてきた。確かに嘘をつくと地獄へ落ちる。

□

子供がだんだん大きくなつて、顔を赤らめるやうな年頃になると一緒に遊べなくなる。悲しい事だ。

□

此間汽車の中で一緒に乘り合せた五つの女の子と仲よしになつた。自分にいろんな繪本をみせて呉れるので、有難うとお禮を云つて持つてゐた蜜柑を五つばかり渡すと、すると、女の子は嚙りかけの鹽餅煎を一枚返禮の印しに喰へと云つて呉れた。自分は非常に忝けなく思つて喰べた。その時の嚙りかけの鹽煎餅はどんな贈物よりも自分にとつては嬉しくあつた。

□

子供の喰ひかけたものは何んでもなく食へる。が老人の喰ひかけたものは如何してもくへぬ。子供の有つてゐる德が食物に迄沁みてゐるわけなのか。

ああ、地上に子供が生れると言ふ事は

素晴しい惠みだ。
人類にとつて、それは永遠の祝福だ。

□

裸形の小兒を見る
其處に美が踊る
裸形の大人を見る
其處に醜さが現はる

□

子供の世界にあつては、建設と破壞とは平氣で無差別に行はれる。
そして、善だの惡だの利だの價値だのと云ふ事も絶對に無い。
どんな事を爲ても悔いといふものは更にない。
あるものは喜悅ばかりだ。

□

自分は子供の世界を想ふと、殆んど別世界の觀に擊たれる。

□

親達よ。
子供を自分の玩具とするな、
子供の世界をみよ、初めて卿等は卿等の棲む世界の醜いことを悟るであらう。

□

ひとりの赤ん坊は
優は數人のおとなを翻弄する。

□

子供の動作を眺めてゐると强烈な自己主義者だ。若し誰かに自分の行動を壓えられやうものなら、泣く喚く、殆んど狂者のやうに——全く火のやうだ、手がつけられない。
あゝ 然しながら、子供のエゴイズムは決して他の魂を傷けはしない、何ぜなら利害算段は子供には無いから。

□

子供にとつて遊戯は一つの創作だ。

□

子供の動作は同じ物事に十分と續かない、
それから、それへと變轉する
子供は小鳥のやうだ。
太陽が出る頃には床中で騒ぎ出し
灯のつくころには眠くなる。

□

けふは不思議にも澤山の子供を見た。
みんな花のやうに美しい
　林檎のやうな頰
　星のやうな眼

凝とみつめると快い心もちになつて來る。

□

日曜ごとに自分はさゝやかな兒童の集りをやつてゐます。その中に今年五つになる敬ちやんといふ可愛い男の子がゐます。

或日曜のことでした。

敬ちやんはお母さんから貰つたオモチャの電車を壞して了つたあとで、ベソベソ泣いてゐました。

「敬ちやん、何ぜ泣くの？」と、私は訊いたら、

「電車が死んぢやつた……」と、云つてさも悲しさうに泣いてゐました。

或はお湯を浴びてゐる時シャボンを無茶苦茶に使ひ減らして仕舞つたあとで

「オヂチャン、シャボンがみんな逃げちやつた」と。

ああ、敬ちやんは天性の詩人です。
ことごとに驚異し、創造してゆく
ああ、敬ちやんの前には因習も傳統も規則も何らの權威がありません。
敬ちやんよ、ォォ私の好きな敬ちやんよ ——。
いつ迄も永遠に幼な子であつて呉れ。

異變來る？

風の日に
野を散歩してゐた
すると　急に叫喚やら烈しい拍手の音がする
私は急いで、その音のする方へと往つてみた
まあ　大變な聽衆だ、ギッシリ一杯だ
然し　彼等は整然と一列に行儀よく並んでゐる
開けられた大空の下で
麥が頭を掉り手を動かしてゐる
私はそれが何であらうかを凝と眺めた

眼には見えない　けれど彼等の仲間の一人が素晴しい激越な演説をやつてゐるに違ひない

おうおう　演說が最高潮に達したものと見えて
何萬と曰ふ麥達が一齊に
手を振り　頭を掉り　足踏みしながら
中には感極つて泣いてゐる麥もあつた
全體が洪水のやうな感動を浴びてゐる
おお　彼等の世界に何事が始り　何事が叫ばれ　何事が議されてゐるのか

私にはそれが少しも解らない、ハテ何んだらう？
然し彼等の感動の烈しい樣子でみると
是は容易ならぬ恐しい異變が
近く人類に迫つて來てゐるやうに感じられた。

煩惱

ひとりでゐると淋しい
本當に寂しい
今日も今日とて　ふらふら　と表へ出た
「汝は何を求めに出るのだ！」
突然な聲に私は驚いた
私が悄んぼりとした見窄しい風で
うろうろ　と野良犬のやうに
あてもなく暗い巷に彷徨つてゐる自分の姿を眺めたとき
「汝は何を求めて歩くのだ！」
再び何處とも無く聲が聞えた

ハッと私は思つた
そして默つて郊外の草小舍へ戻つた
壁に吊したダビンチのモナリサが
皮肉に笑つてゐる。

オオ、馬糞よ

カラリと晴れた秋の日の午後
自分は箱根舊街道を歩いてゐた
始めの間は　美しい自然に惹つけられて
自分は愉快に歩いて往つた
さうだ　慥か二里位は元氣で歩いた

そのうちに
美しい自然がだんだん恐しくなり出した
餘りに植物の勢力が多いので壓迫された
誰か人が遣つて來ないかな——と、思つた

遂々　耐えられず
大きな聲して讃美歌を歌ひ出した
その聲は　その聲は　植物に憐れみを乞ふやうな風に自分には思はれた
何んとのう落ちつきが無い
だんだん慌て出した

ああ　決して決して斯んな山中へは獨りで來るもんぢやないと沁々後悔した。
處が　ふいと足許にホヤホヤの馬糞が一抔團子のやうに轉つてゐるではないか
馬糞。オオ馬糞！

自分は馬糞を見た時
百萬の味方を得たかの如く雀躍りした

心は　うれしさでこみあがつた。

ああ　淋しい山中に一塊の馬糞が轉つてゐた事は
どんなに私を狂喜させた事であらう——。
馬よ　私はお前の糞に感謝する
人間は淋しくなると
馬糞に迄慰めを感ずるものだ。

自然法爾

西の人は曰ふ
求めよ然らば與へられん——と。
東の人は曰ふ
求めぬところに與へらる——と。

君達は何れに從ふや西か東か

私の經驗は私に告げる
西を求めて遂に東に來た
然し今では東西を超えて歩きまわる

凡て在るが儘に——。

永遠の神祕

病葉が一葉ふんわりと
地に落ちた。
その音や寂しく無限に響く。

最後の審判

外は强暴な嵐が吹き捲くつてゐる
草木は必死となつて祈つてゐる。
庭を見ると早や三本の木は根こぎにされた
今　一本の松の木は今にも倒れさうになつてゐる
危ない！　あッ遂々やられて了つた
オオ　何んと言ふもの凄い光景だ。

梅や柿の果は三分の一すら殘つてはゐない
噫　嵐は嵐は自然にとつては恐しい審判の日だ
オオ　人間は最後の審判が來ないとは誰が豫言し得る

油斷しちやならない
油斷しちやならない
今は眠りより醒むべき時だ。

睡蓮

睡蓮よ！
貴女は腐つた泥の中で咲いた聖淨な花だ
それは貴女の眼が立派にそれを證してゐる
わたしは貴女の眼をひとめ見て
直ぐと　それと悟つた。
貴女は腐つた斯んな池の中に咲いてゐても
決して貴女の魂は汚れてはゐません
安心して下さい——。
私はそれを信ずる
どうかその聖さをいつ迄も保つてゐて下さい。

又　貴女に逢ひませう
泥に咲く睡蓮よ！
ではさよなら。

十字架に見える電信柱

一本の十字架が往來の眞ん中に立つてゐる
おやおや　可笑しいぞ
はてな十字架かか知らん？　如何したのだらう
傍に寄つてよくよく見れば
それは新しく建てられた一本の電信柱であつた

その柱にはまだ線が架されて無い
たつた一本
その一本の尖きに一本、棒が横に出てゐる
遠くから眺めるとそれがハッキリ十字架に見える

おう　その電信柱は朽ちるまで地上に在つて
いろいろの使命を果すのであらう

うれしい音ずれも
悲しい音ずれも
人の世のさまざまの相を
おう電信柱よ
お前は今建てられた計りだ
是からお前はその劇しい職に就てゆくのだ
確かに十字架の氣持が無ければ
迚もさう言ふ重職には耐えられまい

おう　新道に建てられた一本の電信柱よ

ぼくは今、お前の雄々しい十字架の姿を思ふと
お前の決心を識つた
本當にお前は偉い聖者だ

ぼくは今朝　お前の姿を見て莊重な氣持に擊たれたのだ
そして　祈つた
お前のやうに生涯十字架を負ひ度い——と。

電信柱よ！
おう　十字架に見える一本の電信柱よ
いつまでも、いつまでも丈夫でゐてお前の聖職を果しておくれ——

凱旋の老將軍

久し振りで蜂を飼つてゐるKの家を訪ねると
まつさきに子供達が腰や手にぶら下る
猫までが小さな鈴をちやらん　ちやらん鳴らせて噪やぐ
蜜蜂迄がぶむう——と唸つて歡聲をあげる
おお浪のやうな歡待！
孤獨な自分は始めてホームの溫かさを知つた
　Mさん悅んで下さい
　今年はウンと蜂が蜜を採つて呉れてね
ああ主婦の顏は悅びで　はち切れさうだ

良人に逝かれて數十年
數人の子供を擁して
噫　あらゆる苦惱と辛酸を嘗めて來た主婦
きつと締つたその口元には
今や凱旋する老將軍のやうな面影が
穩かに漂うてゐた。

夏よ來れ

降り續いた永い間の雨はれて
まあ　けふは素晴しいよい天氣だ

海のやうな蒼い空には雲もない
見れば草や木の葉は輝いて
今日のお天氣を感謝してゐるやうだ
ぼくは　此日汽車に乘つて小田原の町へ往つた
青田の中を　するすると汽車は駛つて往く
よい氣もちだ
本當に今日は好い恵れた日だ

ああ　永い永い間降り續いた暗い雨が
たつた　今日のお天氣ですつかり忘れて了つた
最う太陽の光は　夏の支度の出來た事を思はせるに充分だ。
そろそろ　海が山が慕はしくなり出した
今年の夏は氣のあつた日と一緒に往く事を想うて心は踊る
おお　夏よ　燒きつく夏よ來れ——、
ぼくは素裸體でお前を讃美する。

朝の散歩

野の自由より私は歌ふ
今地球より闇はうすらぎ
白雲の彼方より　赫々たる大太陽徐々に現はる
雀は歡喜の先驅となりて沈默をやぶり
草や木の葉は波のやうに呼吸をなす
大地は靜かに眠りより醒めて光を拜す
ああ　莊重なる曉の序曲
雨　晴れ
蒼穹　愈々青く
靜かなり　靜かなり

醒めゆく野の自由より私は歌ふ
やがて私は主と共なる悅びの朝餐をすませて野へと往く
オオ　主と共に　何處へでも
私は裸足で猿股一つの素裸體で歩く
おう　私に依つて再び現世は太古の昔に復つたやうだ
何といふ快悅な空氣だ

雀よ轉えずれ
雲雀よ歌へ
大地を歩く此の裸形の私を！

星のやうな露は到るところ私の足にキスをする

妬ましくなつたのか
不意に　水晶のやうなオシッコをひつかける
小蛙共
おう　みんな私を禮讃して吳れるのか
難有くおもふぞ。

今朝は又なんといふ祝福されし日であらう
あれあのやうに
草や木までが
ぴよこ　ぴよこと　つむりを下ゆて私に挨拶をするではないか。

赤ん坊の前に恥ぢよ

どんなものかと思つて自分は二等車に乘つてみた
おう　盛んなる光景！
藝者　軍人　紳士　學生　坊主　老人と赤ん坊　成金　貴婦人　令嬢　異人　おう旅役者
迄も乘つてゐる　全く華やかな展覽會だ。

觀たところ
どれも　これも盛裝して　ひどくすましこんで優越を誇つてゐる
皆　落第だ
ああ　淺墓な見え坊よ　マアテリヤスト——。

此の中でひとり赤ん坊の眼だけは星のやうに光つてゐる
オオ　その新鮮と單純！
車中の人達よ恥づるがよい
ひとりの赤ん坊に——。

彼女の意志

一本のクロバーを拐ぎとつてコップに挿した
始めは花の頭が枝の具合で斜めになつてゐた
それが一時間の後には
まあ　どうだらう
か弱い彼女は　頭をまつすぐに擡げようとして非常な努力を續けてゐるのが解つた
オオ　名もない路傍に見捨てられてゐる一莖の花ですら
高く天に伸びようとする勇しい意志がある
敗けてはならん、敗けてはならん。

或日の祈禱

神さま！
何卒　私の悪しき癖をお直し下され
まこと　私は私の悪しき癖のために
どれだけけふまで
あなたを悲しめ傷ましめましたか
思ふだに慄ぇあがります
何卒　私の罪をおゆるし下されませ
神様！
あなたを　まともに凝視てその日その日を過ごさせ給へ

神さま！
毎日　懺悔することを教へ給へ
懺悔なくして　私はあなたの聖前に立つことが出來ませぬ
まこと　ざんげは　私を危ふき淵より脱れさせて　あなたの聖前に在る歡びをあふれさせます

オオ　眼に見えで
オオ　眼で見る以上　確かなるわが神エホバ
あなたの仰せを勇敢にまともに
そのまま　何ら私なく一筋に
奉行の出來まするやう信を増させて下さい。

お布施

けさ　僕は用があつて出掛けてゆくと
路傍に遊んでゐた二人　それは五つ位の幼な子が僕を見るや
オヂチャン　あげよう——と、言つて
小さな草の葉一枚僕に呉れた
難有う——。悅んで僕は感謝した
幼な子は　自分が悅んでゐる風にさも滿足したかの如く
いつまでも　いつまでも自分の姿を目送してゐた、星のやうな瞳をみひらいて
ああ　見知らぬ幼な子が自分に草の葉一枚お布施して呉れた事は　どんなに自分を感動せ
しめたことであらう

おう　ふたりの見知らぬ幼な子よ！
たつた草の葉一枚が斯くも自分を悅ばせたことを知つて呉れ。

夢か夢か

電車を降りて
ふい　と空を見りや
あッー驚いた。
今にも夕立が來さうだ。天の一角には黑雲渦卷いて　刻々に異變の徵！
すう——と、生溫い風が氣味わるくも頰を撫でてゆく

やがて　ポツリと來た
見れば群集は右往左往　商人の店では慌て返して軒並に片つけてゐる
まるで火事場のやうだ。
自分は大股にに急いで往くと

俄かに一閃ぴかり——
ヒャッ——と、慄えあがつた瞬間
百雷が一時に爆發したやうな轟き
續いて雨が矢のやうに地を衝く
叫喚　悲鳴　甚どい騷ぎだ
それらの叫びが凡ゆる騷音と一緒になつて
まるで地獄のやうな修羅場を展開する
それは　どう見たつて人間と自然との劇しい搭鬪だ

それが　噫世分後には
如何です　凡てを忘れたかのやうに　けろんとして……
大空は青く澄み
陽は赤赤と地を輝らし

而も　何事も起らなかつたかの如く
人は悠々と歩いて往く

おう　是はまあ什うした譯か
夢か夢か　自分は自分の眼を疑ふ。

恐しい色

凡てが綠色のまん中に　たつた一本
眞赤なそれは罌粟に似た素敵な大輪な花が咲いてゐる、たつた一本だ。
燃えてゐる
燃えてゐる
狂へるやうに
天空に向つて勇敢に咲いた名の知れない眞ッ赤な花
素晴しい　偉大なものだ　恐しい花だ
ゴッホが見れば屹度窒息するであらう。

自分は近寄つて往つた　その花に

然しながら　如何しても傍まで往けなかつた　恐しくて
自分には　その花が　今にも飛び付きさうに見へたから。

ああ　凡てが綠色の中に
眞ッ赤に咲ける大輪の花
自分は　その花に威壓を感じて恐しくなり出した
オオ、赤といふ色の恐しさを今こそ本當に知つた。

野の禮拜

未だ現はれざる教會　野に在り
野に往きて拜め
地の教會に疲れたる者よ

雲、蒼穹にありて祈り
微風地を這うて歌ふ

汝　彼處にて彼と會はん
往け！
野へ！

而して汝が爲にかかれたる聖書(オオバイブル)をよめ
草に
木の葉に
小鳥に
オオ、そして名も無き花に！

噫　雲蒼穹に在りて祈り
微風地を這うて歌ふ。

迷路

自分は嘗て
聖者のやうな生活に
自分の姿を見ようとした
そして聖者巡禮をやつた
おお　過去の苦しいおもひ出よ
併し　それは決して空しい巡禮ではなかつた
さりながら　今は置かれたままの愚鈍な位置に安んじてゐる
おお　自分が聖者になるには餘りに惡魔過ぎる
いいや　惡魔そのものだ
だが　今では自分に器量の無い事を悟つて

とてつもない夢を追ふ事をやめた
その時　何んとのう安らかな氣もちが
こんこんと湧き出した　泉のやうに……
そして大地をしつとりと踏んで往くやうな確かさをおぼえる
自分は　最う此儘で　ありのままで
神のふところに憩うてゐる事が解つて
ほんたうに　忝けなく思ふた
オオ、涙が滲れる。

聖　默

人間が言葉を出さなくては
對手に意志の傳達が出來ぬといふ事は
ああ　恥しい事だ　全く情けない

たつた　一瞥
たつた一瞥だ

それで全部が解ける
耶蘇があの十字架にかからうとする生死の刹那
凡てを深い沈默に委してゐた

堪らずして叫び出したのは百人の長であつた
「こは　まことに神の子なり」と。
噫　偉大にして崇高なる耶蘇の聖獸！

老僧の深切

ある德の高い老僧が唐紙を持ち出して來て記念のため
何か書いて呉れ——と。自分に言はれた
自分は少々羞ぢと躊躇とを覺えたが、一氣呵成に書いた。
熟と眺めてゐた老僧は
突然
貴方には深切が無い——と言つた
自分は老僧の叫びに吃驚した
貴方はもつと深切に書かなくてはなりません　字は幾らへタでも深切が籠つて居れば私は
うれしい——と言はれた

噫　自分は老僧の言葉に擊たれた
以來ハガキ一枚かくにも老僧の言葉をおもひ出すと走りがきが出來なくなつた。
たつた一字の文字ですら深切に書くのと書かないのとは
非常な差があるものだと言ふ事を痛切に感じた。

星の嘆き

夜蒼穹に光つてみえるお星さま
あれは　みんな自分達人間の仲間だ
人間が死ぬと星になる——。
これは幼いときぼくは伯母さんから聞いた
眺めてゐると
何だか物言うてゐるやうに聽える
　お前達は　みな仲善く暮せ——。
　私達は天へ登つてから始めて解つた
　人間が赦し合ひ助け合ひ愛しあふてふ事が一番可いことだ
　天へ登つて喜びを感ずる事は

これ　よくお聽き
愛し合ふてふ事であつた
その事はお前が天へ來ると沁々と解るであらう
今は爭つてゐるお前達は　醜いことでな
私達は毎晩それを見下してはらはらするのだ
私達が光つてゐる事は
それをやめてお呉れと云ふ知らせなのだ
偶には地上の男女が
私達を仰いで呉れる
仰いで呉れる時は　みんなの魂が濡れて來る
さうして　私達を眺めて誓つて呉れる
最う　決して爭はない
赦しあふ

助けあふ
愛しあふ——てな
だが　噫　私達が眠つて太陽が昇るころには
おお　人間はその誓ひを忘れる
無理もない　無理もない
私達が地上にゐた時も然うであつたのだ
けれど　さう言ふ愚かな事は再び繰返してはならない
お前が天上へ來た時　まつ先きに涙流して悔いる事は
地上にあつて醜い爭ひに浮身を窶した事であらう
私達もその嘆きに瞼が腫れた
おお　私達は聲を枯らしていふ
よく聽いてお呉れ
短い地上だ

みんな仲よう暮してお呉れ
お互ひが助けあひ赦しあつてお呉れ
……
……
わたしに星様の言葉が辛つと解つたとき
廣い野原で自分は泣てゐました。

章魚の足

都會の郊外では　畑や田甫が潰されて
だんだん家が建つ　マッチ箱のやうな家が
大丈夫と思つてゐた閑寂な自分達の周圍も知らないうちに
まあ　章魚の足のやうにぢりぢりと
東京の臭ひが押しよせて來た

この鹽梅では　今に自然は人間に征服されて
ゴビの砂漠のやうに
あゝ　青い色のものは跡を斷つであらう

斯うした現狀は可いのだらうか惡いのだらうか　自分には解らない
が尠くとも　綠色が地を去る事は考へた丈でも息が窒りさうだ

或時の聲

お前はな
猫の眼玉のやうな貧弱な主觀で
淺はかな考へで　果敢ない智慧で
ものの本質に突き入らうと焦つてゐる
ああ　それは雲を掴まうとするやうなものだ
ものの輪廓だけを知つて敢えて中へは這入らうとはしない横着者奴——。

本當にお前が
俺を見ようとするならば
お前の有つてゐる凡ゆる主觀を捨てなくてはならない。

お前の計ひ　工夫　智慧——

そんな小ッぽけなものは棄てゝ了ふがよい

小慧しい主觀を後生大事と守つてゐる間は

ああ　永劫にお前は外を狂奔して　そして死ぬるであらう。

お母さん

わが仕事一部出來たり

この悅びをわが母上に知らさばよとて

急に思ひ立ち汽車に乘り鄉里へ歸る

鄉里まぢかくなる程に

雪はちらちら風に狂ふて

舞上り　舞下る

汽車はその吹雪の中を

溫き故鄉へと　我を乘せて駛る

あの山……
この山……
おお　見覺えのある……
少年時の思ひ出はぴちぴちと魚の如く跳ね返る

たけふ　たけふ——驛夫の呼び聲に
さては　着いたかと胸はさわぐ
ああ　わが生れし故郷よ
自分は廿八年ぶりにて
お前のふところに歸つて來た

街の模樣　人の顏
その言葉の訛りよ

昔ながらのなつかしさ

おう　自分は泣かんばかりの嬉しさに咽びかへつた
みなと一緒に爐を圍んで澁茶を啜つたその夜の歡嬉！

翌朝
朝日の雪に照りていとど美しく
囀る雀までが　おお懐しいのだ

姉　妹　姉の子妹の子　伯母さん
みんなして亡き母上の展墓へと急ぐ

雪を踏んで墓に到つたとき

突然私は叫んだ
「お母さん……」
嘘！　姉も妹も伯母さんも私と一緒に泣いた……
おうおう廿八年ぶり　察して下さい——。
五つの時に永遠のおわかれをしたお母さん
みんなが相擁して泣くのも無理では無い……。

叱られて

武藏野の寂しい原ッぱに自分は起居してゐる
あまりに淋しいので巷へ出てみれば
ああ　一層寂しくなつて
再び自分は原ッぱの巣へ戻つて來る

何うしてこんなに自分は淋しいのか
神様に見放されて了つたのではなからうか
いいや　然うでは無い
お前が　神様の許を離れて了つたからだ
本當ですか？

本當だ
おう　おうそのお言葉は何と云ふ確かさだ
私は　私は一體何したら可いでせう……
　お前の内に動いてゐる
　ベアトチリエーを追ひ出して了へ——。
追ひ出す？
然うだ
……
見よ　彼は神様に叱られて可哀さうに泣いてゐる。

自分は野の香りを嗅ぐ

自分が野に住み野の香りを嗅ぐことをもつて
唯一の樂慾としてゐるのは何の爲であらう
解らない——
解らないが　自分が野を歩むとき本當に落つく
野に歩むとき始めて自分の赤裸々な姿にぶつかる

噫　野は自分にとつて無くてならない家庭——其處に
父母兄弟姉妹　そして親しき友が自分を待つてゐる
溫い言葉や友情のまなざしが光のやうに溢ふれて來る

お解りでせう
私が野に住むことが——。

榮えよ娘

今日は日曜だ
朝から子供達が
山へ往きませうよ
山へ——。と私を引張つてゆく
山にゆけば
吃驚した事には
いつの間にやら草(ひすめ)が大きくなつて羞しさうに自分に會釋をしてゐる
わなわなと皆歡び顫えて
たをやかな娘どもよ！
今はお前達の世界だ

ウンと伸びて榮えてお呉れ
ああ　自分はお前達の香りを嗅ぐと魂が泣く　うれしくて　うれしくて
暫く見ないうちに斯んなに大きくなつたのだもの。

自分の内に生きるベアトリチエー

自分は今年卅四になつた
まだ獨身を守つてゐる
それはアル者の來るのを待望してゐるから。

神は自分に非常に善きつゝましやかな一人の女性を與へんとしてゐられるやうだ。
それがいつ　與へられるか　ハッキリ解らぬ
併乍　自分は屹度與へて下さるであらうと　否與へられてゐるやうな氣がする　それは確かに感じてゐる
おお　ベアトリチエーのやうな女性が
靜かに自分に近よりつつある事を意識する

ひよつとしたなら
明日　或はおゝ　今日　その花嫁が自分の門を叩くやうな氣がする。
それをおもふと自分は毎日うれしくて耐えられない
さう言ふ希みの起つたのは最う十年も前だ
自分にはそれが　キリストの再臨のやうな氣持で自分に與へられたベアトリチエーの出現
を日毎に待望する

自分は神の約束を堅く信じてゐる
自分は　見ぬ戀人のために貞潔を死ぬ迄も守るであらう
おお　ベアトリチエー!
自分は寂しくなる時　お前の名を呼ぶ
そして遠い甘い　崇高な情熱に醉ふのだ
おゝ　ベアトリチエー!

自分はまだお前の姿を一度も見はしないが　いつか　偶然に會へるかも知れぬ
おゝ樂しき待望!
自分の心に生きてゐるお前のやさしい瞳をおもふ時
自分は自分の生れて來たことの幸福を泌々と感じる。

野の祭りに招待されて

麗かな春の陽を一杯に浴びながら
私は今招待されて野に來てゐる
麥の芽が幟のやうに揃つて野の祭りを知らせる
貴方　こちらです——と
やさしくも
野の香りが先導となつて私を案内する
見れば
何處も斯處も蟲達が歡聲をあげて動搖めく
うれしさうに花達が　赤やら青やら紫紺さては目のさめるやうな綠色　さまざまの奇麗な
おべべを着飾つて私に挨拶を交す

是はまあ！　どうした事か
あれ　あれ
御空の雲が御輿のやうに靜かに此方へ練つて來る
微風が　それに應呼してひどい騷ぎだ
何んと云ふ賑かなことだらう
草や木の葉までが身をふるはして歡ぶ
おお　是はまあ大變！
御覽なさい
凡てが展開された舞臺となつて
招待された自分までが
おう　舞臺中の人物となつて仕舞つたではないか

途上の光景

今自分は郊外を歩いてゐる
橋のふもと迄來ると
五六人屈竟な男と
それに交つて一人の美しい娘が
暢氣さうにキャッキャッと燥やぎ乍ら魚を釣つて居る
小桶の中を覗くと數尾の鮎がぴち〳〵と跳ねてゐる
自分はそれを一瞥しながら又歩き出す
すると向ふの田甫に十人程の女が腰をかゞめ
裾迄泥を浴び乍ら田植ゑをやつて居る
その傍の

まあ！　豚小舍にも等しい家の前で
歳とつた百姓夫婦が
汗ふきふき麥穗を叩いてゐる

自分は暫く
百姓の働く光景と
橋上の釣人とを交々に眺めた
眺めてゐるうちに
おゝ　心のどん底で俄然叫び出した
見よ！
貧しき百姓の勞役を！
彼は生活に無くて叶はぬものを提出する
報酬として與えられたものは

辛うじて　その日の糊口にすら困難なのだ

再び眼を橋上に轉ずると
其處には別莊を持つてゐる主人や
奇麗な着物をきかざつたお嬢さん達が
怠屈まぎれに鮎を釣つて居る
自分は考へた
一體　彼等は世に何を提供するのかと……

噫　此の異つた二つの生活！

此儘でよいのだらうか
喝ッ！

誰が此儘でよいと言ふ——。

現在の社會制度の不合理とその矛盾！
夫を平氣で眺めてゐられるだらうか？
此時　自分は全身に熱湯を浴せられたかの如く異常なる苦惱と昂奮とを感じた　噫！
更に一轉して
自己の生活を反省すると
こゝにも不合理と矛盾との悲しみが
あからさまに展開せられてゐる

おう！　此痛憤を一體誰に對つて發してゐるのか？　自分は　自分は——。

大空では太陽が

鈞する人達や
勞く百姓達
あゝ矛盾に泣く自分にも
等しくその光を輝してゐる……

運命を司る者

老いた郵便屋さん
貴方は最う廿年間やつてゐられる
隨分感心です
廿年の間　雪が降つても　風が吹いても
赫々と陽が照つても本當に文字通り
一日二回　とことこと　野を横ぎり　丘を超へ　河を渡つて……
ああ　毎日朝と晩
幸福と悲劇とを戸の隙目より投げてゆく
人はあなたの姿が見へるのを
どんなに歡び待つ事でせう

又、或人にとつては
あなたの姿が怖しい悪魔のやうにも……

ああ　貴方は慥かに人々の運命を掴んでゐられるやうだ
自分は貴方の固い粗い手から渡される
幾つかの書簡を握るときに
妙に心は躍る
笑つたり
怒つたり
悲しんだり
おう　貴方は自由自在に私を操る不思議な方だ

ダンスする蠅

今日は少し暑いなあ　と思ふと
淋しい部屋が賑かになり出す
蠅がダンスをやる
手擦り
頭擦り
宙に飛翔して又降下する
だが　冷たい日にはお休みだ
確つと　天井にこびりついて了つて
死のやうな沈默に浸る
だが　今日は暖い

まあ　澤山な蠅達が何處から來たのか私は知らないけれど
樂しさうにぶんぶん　唄ひながら盛んなるダンス
凝と眺めてゐると孤獨な私の心も一緒に躍り度くなる
おう蠅共よ　盛んに踊つて樂しめ
秋も殘り少なくなつて來た
私を慰める蠅達よ今日はウンと踊つて
踊り拔いて私を笑せてお呉れ　私も淋しいのだ

オオ　私はうれしい

私には何も無い
金も　家も　着物もない
學問も智慧も　そして名も位も
妻も子も
オオ　そして父母も無い
ああ　憐れむべき者よ　お前は什うする——と他は曰ふ
病氣にでもなつたら
斯んな事を云はれると
私の心は暗くなる

思へば三十三年の今日まで胃袋を切りとられても
生きて來た事が摩訶不可思議のやうだ
什う考へたつて
それは神の恵みだ　勿體ない御慈悲だ

オオ　此一つの御慈悲こそ何物にも代へ難い私の全財産である
此おめぐみ一つが
私の力　私の生命　私のすべて
ああ　何も無くても
此お恵みに生きるこそ
私といふものが在るのだ
うれしい　本當にうれしい

斯くて
私は一生
神様の御慈悲と榮光とを歌ひ讃へるであらう——。
オオ　神様の恵みを憶へば
何も無くても　私はうれしい